

目次

会長就任のご挨拶	内田 雅夫・・・2
神戸市外国語大学イスパニア会 第3回総会および懇親会	・・・4
イスパニア会第3回総会等に参加して	石津 法子・・・5
イスパニア会第3回総会等に参加して	本井 智美・・・7
懇親会の様子	・・・9
第3回イスパニア総会を終えて	伊藤 卓郎・・・12
神戸市外国語大学同窓会 マドリード支部設立について	水谷 奈津・・・14
怒りから拍手喝采に	田尻 陽一・・・17
スペインに住んで、感じたこと	水谷 奈津・・・19
私の海外生活 - スペインで暮らして -	山下 真里・・・22
アルカラでの生活	穂原 三佳・・・26
メキシコに住んで	八木 優子・・・29
メキシコでインターンシップ	田上 智貴・・・35
スペイン遊覧追想記	岩井 星華・・・37
スペインとのつながり	谷口 並子・・・39
私にとっての神戸市外国語大学	田中 いずみ・・・44
『学生の本分を忘れずに！授業には出席しましょう！』	小野 勝利・・・47
卒業してから	石井 葉子・・・50
卒業してから	泉村 寛之・・・53
外大を卒業してから	平山 敦士・・・55
神戸外大イスパニア学科1期生、2期生合同同期会	伊藤 明・・・57
イスパニア語劇団・語劇祭について	仁ノ内 詩穂・・・62
Libro interesante	
『ムシェ 小さな英雄の物語』	竹谷 和之・・・66
<i>El libro negro de los colores</i>	本橋 祈・・・68
神戸市外大同窓会・楠ヶ丘会の総会および懇親会のご案内	西川 喬・・・70
近況報告	・・・71
神戸市外国語大学イスパニア会 役員名簿	・・・73
「会員の近況報告」に関する投稿規定	・・・75
編集後記	竹谷 和之・・・76

会長就任のご挨拶

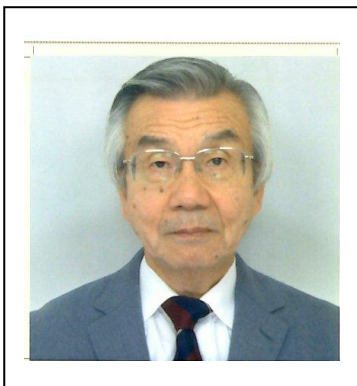
内田 雅夫

1971年（昭和46年）卒

この度、イスパニア会会長に選出されました内田雅夫です。イスパニア会の目的は会員相互の親睦と友好のために協力するとなっており、役員の皆さまとともに一所懸命努めたいと思います。どうぞ、ご支援お願い致します。

私たちの年代である「学20H」は高橋正武先生の時代でした。

先生は、「神戸に来たのは、そりゃあ給料が高かったから」と、あの「高橋節」では言われながら、「ここはイスパニア語の専門家を作るところだから教職課程は不要だ」と言われ、私たちは教職の勉強不可でした。先生の傘下教授陣のおひとりからは、「高橋先生は、東京外国語学校入学のころから、僕は辞書を作るのだ、辞書を作るのだと口癖のように言われていたよ」とお聞きしたことも憶えています。



わたしたちが「スペイン語」と言おうものなら、「きみが習っているのはスペイン語かあ、そうだろうなあ。だからだなっ？」とか言われ、学生のプロ意識を高めようとされたりしました。スペイン学科ではなくイスパニア学科なのでした。

昭和42年ごろ、たまたま、私の父が六甲ケーブルカーの中で出会った旅行中の東京外大生グループと話したとき、「ああ、神戸外大のイスパニア学科はいいですよ。高橋先生がおられるから。」と言っていたぞと帰宅して息子の私に話していましたが、私たちの学科はその世界では一目置かれているのだなあと思ったりしました。やはり、「大高橋」の「気」が流れていました。

私は、弓道部OBで外大道場へよく行き学生と一緒に弓を稽古していますが、同学科の学生に聞いてみると、高橋先生の『西和辞典』はおろか、「高橋正武」のお名前すら知りません。いったい、どうなっているのでしょうかと思ったりしています。「学祖」とも言うべき人が無名のように。ちょっと淋しいですね。

会長とはいえ、私は、大それたことはいえないし、出来ませんが、高橋先生の思い出を折に触れ話したり、書いたりしてみたいなと思います。

略歴

- 1948 年 神戸市に生まれる
- 1967 年 神戸市外国語大学イスパニア学科入学
- 1971 年 神戸市外国語大学卒業
- 1971 年～2008 年 シャープ株式会社勤務内 13 年間中南米に駐在
(1981～1989 年パナマ主席駐在員、1999～2004 年ブラジルサンパウロ主席駐在員シャープ・ド・ブラジル社アドバイザー)
同社定年退職後、2012 年まで同社嘱託。この間、ほぼ中南米の市場開発に携わる。
- 2009 年 住吉歴史資料館事業推進委員
- 2018 年 奈良大学卒業、学芸員資格取得
神戸大人文学研究科、地元各校・機関と連携し、特に子供たちへの易しい地域史、並びに防災知識の普及を行う。
編・著に
『阪神淡路大震災資料集 住吉の記憶Ⅰ～Ⅲ』
(平成 27 年～30 年)
『わたしたちの住吉』(平成 30 年) など。

神戸市外国語大学イスパニア会 第3回総会および懇親会

第3回総会は2018年10月20日（土）14:00より、次のように行われました。

総会次第

I. 報告事項

1. イスパニア会理事会開催について

II. 審議事項

1. イスパニア会会則改定について
2. イスパニア会役員について
3. イスパニア会会費収支決算について
4. その他

III. その他

1. イスパニア会関連 URL

審議事項に関しては、いずれも承認されました。

この後、木村榮一先生の講演会「思い出すことども-創設期のイスパニア学科」が行われ、続いて三木記念会館において懇親会が催されました。

イスパニア会第3回総会・講演会・懇親会に参加して

石津 法子（旧姓 近藤）

1989年（平成元年）卒

先日の第3回イスパニア会の総会に友人と二人で初めて参加しました。最後に来たのはたぶん20年以上前、という母校を久しぶりに訪れる機会となり、とても懐かしく嬉しく思いました。

大教室で“きーさん”こと木村先生がご登壇された時には、あまりのお変わりのなさに驚き、教壇に肘をついて昔と全く同じ口調で話を始められると、まるで30年前に戻ったような気がしました。

あの頃、木村先生の授業はいつも、落語で言うところの“まくら”として、毎回様々なジャンルの本の紹介から始まり、「大学生にもなってまだこの本読んでなかったら、恥ずかしくて死にたい思わなあかんで・・・。」などと言いながら、その日の本の題名を黒板に書かれるのでした。そのとても面白い内容に熱心に耳を傾け、後で探して読もうと本の題名と作者名を書き留めるところまではいいのですが、そこまでやるべきことはすっかり終わった気になり、その後の授業の内容についてはあまり記憶にないのが申し訳ない限りです。

今回の講演も、「スペイン語学科草創期のことども」というタイトルなのに、先生の子供の頃の話から始まった時には、この話はいったいどこに向かうのだろうと思ったのですが、大学入学までの紆余曲折はあの頃のように“まくら”だったようです。国公立大学などとても狙えないはずだったのに、たまたまイスパニア語学科が新設され一期生で“穴場”だ、という情報を聞きつけ、神戸外大を受験して合格したのがイスパニア学科に入ったきっかけ、というところでは思わず笑ってしまいました。願書を出すまでイスパニア語がスペイン語のことだと知らずに、聞いたことのないマイナーな言語で面白そうだったから、という自分のいいかげんな志望動機と重なりさらに親近感がわきます。（木村先生と一緒にしてしまっは大変失礼ですが。）人生何がきっかけでどこにご縁があるかわかりません。

学科設立当初の2-3年はスペイン語の教科書がなく、授業中のノートを切り貼りしたものを基に4期生が入学した時にやっと教科書ができたこと、「一番大事なのは“人”」というお言葉通り、先生方の人と人との繋がりとおかげで、小規模な大学ながら日本のスペイン語学科の中でも確固たる地位を築いてくることができたこと、など当時の様子が本当に目に浮かぶような、相変わら

ずの木村節に学生時代のように聞きほれてしまいました。そして、その歴史のほんの一部だけでも自分も参加させていただき、先生方や先輩方、同年代や後輩のみなさんをつながりを持てたことは、とても幸せなことだと感じました。

総会でも懇親会でも、イスパ卒業生は歴代のイスパニア会会長の方々を筆頭に、どこかいいかげんでおおらかなラテン気質というのか、硬い雰囲気は全くなくかつ個性的な方が多く、終始和やかで楽しい時間でした。

この度のイスパニア会総会の開催にご尽力いただいた皆様に心から感謝いたします。また次回も皆様とお会いできることを楽しみにしております。

イスパニア会第3回総会・講演会・懇親会に参加して

本井 智美（旧姓 藤崎）

1988年（昭和63年）卒

2018年初夏、SNSで同期からメッセージがありました。『先輩からイスパニア学科の卒業生の名簿を作っているの連絡してほしい、と言われたが、伊藤さんって知ってる？』という内容でした。「語劇の先輩だから、大丈夫、間違いないです」と返事をしましたが、名簿作成の理由が不明だったため、直接伊藤さんにメールをしたところ、イスパニア会の総会になるべく多くの卒業生に呼びかけたい、ということでした。個人情報保護のため、楠ヶ丘会から名簿の提供が困難ともお聞きし、SNSでつながっている数少ない同期生に連絡しました。年賀状のみのお付き合いの友人もいましたが、誰かが知らせるかと思い、行動しませんでした。総会当日、「直前に総会・懇親会のことを知り、参加できなくて残念」との伝言を別の方から聞き、手紙を出せば良かったと悔やんだことを記しておきます。とても楽しく懐かしい会だっただけに、残念でした。

さて、私は大阪出身ですが、石川県金沢市在住25年目で、現在は介護保険のケアマネージャーをしています。金沢弁はかなり上達しましたが、スペイン語にはほぼ無縁の生活で、たまに仕事の移動中にラジオのスペイン語講座を聴いたり、SNSでニュースや映像をほんの少し見る程度です。それで、10月にイスパニア会の総会・懇親会がある、とお聞きして、嬉しかった半面、行っても場違いかなと思う気持ちがあり、逡巡しました。しかし50歳を過ぎ、何事も「これが最後かも」という気持ちが湧いたことと、一番時間を長く過ごした同期生と一緒に行こうと言ってくれ、出席を決めました。

六甲学舎と学園都市で丁度2年ずつ在籍しましたが、卒業から30年、学園都市駅前の風景がガラッと変わっており、外大はどこ？とうろたえました。語劇の先輩方とは卒業以来の再会で、お互いそれなりに年をとっていましたが、大学生当時と同じように話せたのは感動でした。先生方はお一人お一人の佇まいが変わっておられず、直接お話しする勇気がなかったのですが、お見かけしているだけでこれまた感動でした。私は東谷ゼミでしたので、東谷先生がおられなかったのは残念でした。当時いらした先生方のことも思い出しました。

木村榮一先生の講演は、子供時代から大学入学までのエピソード、またイスパニア学科草創期のお話、あっという間に時間が過ぎました。隣で同期生が、先生の話される「閑話休題」をノートの隅にいっぱいメモしたなあ、と思い出してい

ました。イスパニア学科の先生の人選の話は興味深かったです。大学院修士課程・博士課程新設時のご苦勞もお聞きしました。「人は財産」と「引き当てたクジは黙って引き受ければいい、できひんかったら笑ってればいい」という言葉が心に残りました。

懇親会では、冒頭の挨拶で歌が飛び出し、先生方のお言葉にはユーモアがあふれ、関西×ラテンのノリとでも言いましょうか、明るいなあ、と感心しました(北陸在住ゆえ猶更)。西川先生のご挨拶で、スペイン留学のために震災を経験していない数少ない教員、という自己紹介をお聞きし、自分が卒業してから30年間にいろいろなことが起きたものだと思い巡らしました。あの場に集ったお一人お一人に卒業後の悲喜こもごもの人生があり、その間も先生方は外大で教え続けてこられたことがとても尊く思われました。そして再会できた、ということが本当にうれしいことでした。久しぶりに出会った同期生がしみじみと「1, 2回生の時に文法を叩き込まれたおかげで、きちんときれいなスペイン語が話せるみたい。どこで習った?とよく聞かれるよ。忘れてしまったらもったいない。」と話してくれました。現役世代は忙しく、時間の確保が難しいかと思いますが、次の総会・懇親会に、もっと多くの方が出席できればいいと思います。準備・運営にあたられた全ての方々に感謝申し上げます。

懇親会の様子



穏やかながらも
やや緊張した面持ちでの
スタートでしたが、、



お世話になった先生方や



懐かしい級友たちとの再会で



いつの間にか
あの頃にタイムスリップ



楽しい時間は あのころと同じく



あっという間に過ぎていきました



また次回、お会いしましょう！

第3回イスパニア総会を終えて

伊藤 卓郎

1986年（昭和61年）卒

2018年10月20日（土）神戸市外国語大学のキャンパスにて第3回イスパニア総会が行われました。私はイスパニア会の理事の一人として今回の総会の総務司会を任せ、無事にその大役を果たし、安堵しています。

少し時計を逆回しにして、私がイスパニア会理事に任命された経緯をお話したいと思います。あれは5年ほど前の秋頃に、神戸市外国語大学が社会人講座を外大キャンパスにて開講することを新聞で知り、受講しました。その講座はバスク大学連携「現代のスポーツ文化を考える」という内容で、そこで講座を運営されている竹谷和之先生と再会しました。講座終了後に挨拶も兼ねて私が神戸市外国語大学イスパニア学科卒業で、六甲学舎最後の卒業生であることを竹谷先生に伝えると

「イスパニア会で若い理事のなり手を探しているんやけど、伊藤君どう？」

「若いと言っても私もう50歳を超えていますよ・・・（苦笑）。」

「大丈夫、丁度その年代の理事がいないので受けてもらえると助かるんやけどな。」

「わかりました、それなら引き受けさせていただきます。」

そしてその後、年に一度行われる2014年の理事会で正式に理事に任命されました。

イスパニア会会則では総会を4年に一度開催すると定められていますが、理事会では2012年に第2回イスパニア総会を開催してからすでに4年以上が経過し、第3回イスパニア総会をいつ開催するのかを協議しました。会則に従うと次回は2016年開催なのですが、2016年は神戸市外国語大学創立70周年記念イベントが行われるため、イスパニア総会開催は回避して、2017年に準備委員会を立ち上げ2018年秋に開催することでまとめ、開催場所も過去2回は神戸市内のホテルで開催されましたが、今回はホームカミングの意味も込めて神戸市外国語大学キャンパスで行うことに決定しました。

開催の時期と場所が決まると準備委員会のメンバーは出席人数の確認のため、手分けして卒業生名簿の作業に取り掛かりました。私は1985年から1987年の卒業生の連絡先を担当しました。私は在学中にバレーボール部に所属して

いたので、まずはバレーボール部の OBOG 名簿をお願いして入手し、その後ラグビー部、サッカー部と運動部を中心に声を掛ける範囲を広げていきました。

名簿作成する中で最近の SNS の威力と言うか、拡散力はすごいことに改めて驚かされました。現在、国内、海外で活躍している卒業生の皆さんのあいだにまで、あっと言う間に総会開催の情報が共有され、

「伊藤さんっていう人がイスパニア総会開催のために卒業生名簿を作成しているって知ってる？」

「誰それ？総会っていつ？どこで？」

「なんか今年の秋みたい、外大のキャンパスでらしいよ。」

「ふうん、そうなの。どうしたらいいの？」

「伊藤さんって人にメールしてみて」

皆さんの中でこんなやり取りが行われたことでしょう。

最終的には私の手元には 100 名近くの卒業生の連絡先が判明し、私は何とかその責任と役割を果たすことが出来ました。ご協力して頂いた皆様にこの紙面を借りまして心から厚く御礼申し上げます

当日総会を終え総合司会役の肩の荷を下ろした私も懇親会では、諸先生方や卒業以来再会する同期生や各運動部の卒業生の皆さんと懐かしく歓談し、同期生とは帰りの三ノ宮で途中下車して二次会を行い、次回またの再会を約束しました。

今回の総会が始まる前は何かと色々と心配しましたが、いざは始まれば大きな混乱もなく、スムーズに進行され、懇親会でも皆さんの楽しそうにおしゃべりする姿を拝見し、成功を確信しました。次回のイスパニア会総会は会則に準じると 4 年後の開催になります。今回の経験を活かしてもっとたくさんの卒業生がイスパニア会の存在を認知し、次回の総会には出席して頂けるようにつなげていければと思います。

最後になりましたがイスパニア総会開催に携わって頂きましたすべての皆様に改めて感謝申し上げます。Muchas gracias por todos.

以上

神戸市外国語大学同窓会・楠ヶ丘会
マドリード支部設立について

マドリード支部長 水谷 奈津
2003年（平成15年）卒

スペインで暮らし始めて今年で10年が経つのですが、日本人が多く住む都市であるにも関わらず、長らく神戸外大卒の方と知り合う機会はありませんでした。それが数年前に、駐在員としてマドリードで勤務されていた外大卒の大先輩と仕事の関係でお会いし、そこから現マドリード支部のみなさんと知り合うことができました。

みなさんそれぞれのフィールドでご活躍されているのですが、神戸外大で同じ先生方から学んだという繋がりを持つ同窓というのは、年齢も立場も全く異なる人々が集まることのできる不思議なものだなとつくづく感じています。年に数回集まって食事をして、近況報告や先生方の思い出話で花が咲かせています。

私の学生時代はインターネットもまだそれほど浸透しておらず、図書館のパソコンを使ってメールを送るのがやっとでした。留学専門誌から情報を得、語学学校に直接電話をし、手紙を書いて、留学の準備を進めたものですが、今ではスマホで簡単に情報を集めることができます。

しかし、実際に現地に住んでいる人間が持っている情報ほど新鮮で確実なものはないのかと考えています。言葉ひとつをとっても、一年、二年というスピードで廃れ、また新しい意味合いが次々と現れています。制度、習慣といったなかなか表に出てこないことも日々進化しているのは日本と同じでしょう。

外大出身者の食事会は、ただ会話を楽しむ時でもありますが、各分野で得ている最新情報の交換といった非常に有益な時間でもあります。そういった現地の情報を現役生、また日本や各国でご活躍されている皆さんへなんらかの形で今後お伝えすることができれば、と考えています。

これから留学しようと考えている学生のみなさん、また、将来住んでみようと考えている方、そういった方たちとのコネクションのひとつになれるのはいいか、また現地で活躍しておられる方同士を外大卒という関係でつなぐことができればと思います。

小さい規模ではありますが、今後少しずつ日本とスペインの架け橋となれるように、活発な活動を心がけていきたいと思っています。



写真1:初めてメンバーが全員集まった会での一枚。マドリードの老舗日本食レストラン「みかど」にて。このときは「KOBE INTERNATIONAL CLUB マドリード」設立のお祝いも兼ねて灘の日本酒をいただきました。(後列左から：野村先生、室、水谷、東垣、檀原、岡崎、土屋、前列：柴崎)



写真2:数年前の外大卒メンバーの集まり。(左手前より右回り：水谷、室、檀原、野田ご夫妻、東垣)

野田ご夫妻は1980年に神戸市外大卒。マドリードで支部の前身となる外大会を作ってくださいました。

最後に、今回のマドリード支部設立には西川喬先生にお力添えいただき、一同感謝しております。これほどスムーズに設立を承認いただけたのは先生のおかげです。ありがとうございました。

海外生活

怒りから拍手喝采に

田尻 陽一
イスパニア学科 1 期生
1968 年（昭和 42 年）卒

スペインで 3 回スリにあっている。いつだったのか、覚えていない。

1 回目はマドリードの地下鉄の中。プエルタ・デル・ソルで乗ろうとすると、前の大男が向こうをむいたまま立ちふさがった。後からギュウと押されて車内に入った。そのとき、ズボンのポケットに手が入ったのが分かった。隣の男にお前が掏った、財布を返せと言っても、とぼけている。車内はギュウギュウ、こいつに決まっているが、動けない。お前だ、と言っても、その時はすでに財布は他の者の手に移っていただろう。観念した。次の駅で降りた人をさして、隣の男、「ルイ（彼だ）」とイタリア語で言った。バカにすんな！ あの男から俺のズボンのポケットまで手が伸びるか！

2 回目はセビーリャの友達に頼んでロシオの祭りを取材しに行ったときだ。礼拝堂からロシオの聖母マリア像が出てくる。大変な人で身動きできない。すごい歓声だ。マリア信仰の熱狂が伝わってくる。こういうとき、カメラを覗かなくてもシャッターがきれるオートフォーカスのカメラは楽だ。写真を撮ろうと、両手を挙げた瞬間、ズボンに手が入った。隣のイタリア女だ（瞬間 italiana だと思った）。こいつだ、すぐに友だちを呼んだ。ありがたいことに彼は警官だった。バッジを見せて、彼女を連れて行こうとした。すぐに若い男が、彼女はどうしたのだ、何をしたのだ、と言ってきた。財布が渡ったのは、こいつだ。すると、僕たちの仲間が、地面を探して！地面を探して！と叫んだ。若い男が立っていた地面に、僕の財布が落ちていた。しかし、すでに財布を持っていないので、その若い男女を現行犯逮捕することはできなかった。2 人は人混みの中に消えていった。スペインの宗教って、敬虔でも何でもないんだ。お祭りなんだと思った。でも、友達が警官でよかった。それから財布を持たず、現金を直にポケットに入れるようにした。

3 回目はマドリードのバスの中。その前日、マドリードに住んでいる日本人に会って、「この頃の地下鉄は混んでなくて安全だね」と言うと、「みんなクリスマスで国に帰っているからね」という。ええって不思議に思った。その 1 年前、目の前で **moro** のグループが女性のハンドバッグをかつぱらうところを目撃した

ので、「イスラム教徒が、クリスマス休暇？」というのと、「いや、ラテンアメリカ人だよ」と教えてくれた。この頃はラテンアメリカからスペインまで出張するんだ、と思った。さて、スリにあった日の話をしよう。芝居を見てグランビアからベントスのホテルまでバスで帰ろうと思った。やって来たバスは満員だった。満員には気をつけようと思って1台やり過ごした。次のバスは空いていた。これなら安心と思って乗り込んだ。ところが次のバス停で続々と人が乗ってきた。当然だ、前のバスに乗れなかったんだから。ラテンアメリカ人の家族も乗ってきた。何だかボクのほうに満員をかき分けてやって来るみたいだ。でも見ると、15歳ぐらいの男の子と10歳ぐらいの女の子の家族連れ。国に帰らずスペインでクリスマスを過ごすんだな、それにしてもボクのほうに近づきすぎる。用心したほうがいいな。そう思って体を半回転した。その家族連れは次のバス停で下りた。ボクは泊まっているホテルの前で下りた。10時か、ちょっとビールでも飲んで寝るか、そう思ってポケットに手を入れると札がない。あの子か！すごいな！今ごろ両親によくやった、と褒められているのだろうな。それにしても見事な芸だった。拍手喝采ものだ！

スペインではいろんな目にあっているが、スペインは大好きだ。好きというより、いまだに恋してる。この写真、去年の2月のマドリードのプラサ・マヨール。こんなすごいことをするんだもの。行くたびに新しい発見がある。ドキドキする。そう、スペインはボクの恋人だ。だから、ときどき愛撫してやらないと。



海外生活

スペインに住んで、感じたこと

水谷 奈津

2003年（平成15年）卒

私の留学時代の2000年とはすっかり様変わりした現在のスペイン。当時はまだ通貨がペセタの時代で、コーヒー1杯が150ペセタ（約91円）くらいでした。ところが2002年のユーロ導入後、他国にあわせた物価上昇が起こり、コーヒーが今では1.50ユーロ（約200円）となっています。大体他のものも同じような値上がり方をしました。物価だけでなく、ファッションやサービス業といった分野でも境目がなくなってきました。世界的に有名なファッションブランドの店舗やホテルチェーンなどがどの町にも立ち並び、少しずつスペインらしさが見えにくくなっているように感じます。

床にごみがたくさん落ちているのが美味しいバルの証とされていたのが、今では床にゴミを捨てるのがはばかれるような洒落たバルが立ち並んでいます。日本同様レストランは予約が必須です。すっかり変わったように見えても、相変わらずなのは食事の時間。以前、日本からの来訪者の夕食のセッティングをするためにお昼休みのないレストランを探し、日本の夕食時間18時に予約をしたところ、「ランチの予約ですね」と言われてしまったことがあります。18時は基本的小おやつの時間ですが、ランチかディナーかとなるとランチとみなされるようです。1日5食（朝食、軽食、昼食、おやつ、夕食）の国、さすがです。

学生時代、先生方の留学時代のお話を聞いて驚いた記憶がありますが、今の学生さんたちに私の留学時代の話をするとうる驚かれるに違いありません。当時はテレビのリモコンと間違えるほどの大きな携帯電話を使っていました。今では必須のネット環境ですが、当時はWiFiどころか、インターネット回線も各家庭に必ずあるわけではなく、日本へメールするにはインターネットカフェに通うしかありませんでした。もちろんSNSなどあるわけもなく、日本の事情にたった一年ですっかり疎くなりました。日本の家族に電話するにも国際電話用のプリペイドカードを買って・・・と今では考えられない不便さです。その分どっぷりスペイン生活に浸かれるというのはある意味利点だったのかもしれませんが。ところが、今では、町のあちらこちらにWiFiがあり、インターネット電話で日本への通話も簡単になりました。

スペインに留学したことのある人なら一度は経験したであろう、「チーナ（中国人）」「コンニチワ」などと街中で人に言われることもすっかりなくなっていました。これは、全体的にスペイン人の意識が変わってきたということもありますが、この20年程で日本という国のイメージが確立されてきたからだと思います。

昔は、日本は遠い極東アジアの国のひとつであり、中国との違いがわからない、というのが一般的なスペイン人の感じでしたが、最近では、こちらが日本人であるとわかると出身地はどこか、と聞かれます。日本へ旅行したときに行ったところかもしれないと期待しているわけです。日本への旅行がブームとなり、いわゆる

「日本オタク」でない人たちも訪れる機会が増え、スペイン人旅行者数は年々増加しています。そうして日本に魅了された人たちは日本で味わったものをスペインでも見つけて喜ぶ、ということがあります。

日本に負けない美味しい寿司やラーメン、さらにはお好み焼きまで食べられるレストランができたり、スペイン人の日本食の専門家が現れたり、日本酒バーができたりしているのです。多くのミシュランレストランのシェフたち



サンティアゴ巡礼の道、カスティーリャ・イ・レオン州の入り口にて。

写真向かって右が東垣（マドリード支部）、中央が水谷

も日本食材を取り入れたメニューを作り出し、日本に興味のない人でも知らないうちに「タタキ」や「ユズ」を口にしているという面白い現象が起こっています。海藻と一言で済ませていた食材も「ワカメ」「ヒジキ」「コンブ」など幅が広がりました。

そんなスペインに住んで私自身が変わってきたこと。それは日本にいる頃はまったく興味なかった政治や宗教でさえ、この国に住んでいると否応無しに関わるようになったことです。日々そういったテーマに触れていると、さすがに詳しくなり、よく考えるようになりました。テレビでは常に政治に関する議論が行われ、日本での報道よりも各局や各紙によって主張が極めてはっきりしています。地方によっては支持する政党などが特徴的で、たわいの無い会話の中にも政治の話が出るが多々あります。あまり突っ込んだ話をすると、友人や家族同士でも言い合いになりかねないのですが、それが日常の中でよくあることなのが日本では考えにくいことかもしれません。

現在は日系の職場にいるため、日本とスペインと両方の情報を得るのが容易です。長年住んでいるからこそわかるスペインの事情。生まれ育ち、働いたこともあるからこそわかる日本の習慣。こちらに住み始めて10年が経ちました。人生の大半がスペインでの生活となるかもしれません。ヨーロッパという複数の国が集まった地にいることで世界を見る目も変わりました。文化や習慣、歴史など複雑な要因で起こっていることが多々あり、実際にそれを肌で感じるようになりました。一言ではまとめることのできない感覚。年々両国の関係が深まる中、自分を活かす道を模索し続けています。

私の海外生活 - スペインで暮らして -

山下 真里

1989年（平成元年）卒

スペインバスクのビルバオ近く、トラパガ谷を訪れたのは1988年の大晦日。今年でちょうど30年になります。

当時はまだ外大生で、同級生でバレー部の友人Sさんとヨーロッパを列車で駆け巡っていました。ゼミの卒論を早々に提出させて頂き（木村先生、有難うございました）流行りのスキー巨大リュックを持ち、冬のヨーロッパを5週間旅した怖いもの知らずの21歳。「凄い！」としか言いようがありません。友人は私よりお姉さん格で、本当に彼女との二人旅で良かったと思います。

まず、エジプトに寄ってピラミッドを見ようと道を尋ねたところ、その人が田舎を案内しようと申し出たため、その人の友人宅に寄せてもらうことになりました。男性たちが水煙草をパイプで吸っているのを見たり、奥さんが2人いる家で女性たちにベールなしの黒髪を羨ましそうに触られ、口紅を試させてと言われたりしました。その頃はそんなこともあったのです。

お金はないが暇はあった私たちは列車の旅を選びました。コンパティメントで旅の計画をし、乗り込んでくる乗客と話したりして、国境を超える度にお国柄が出る乗客たちとふれあって楽しい旅でした。イタリアでは「ピザなら、おれんところが一番さ！」という人に「パスタは負けない」と隣の人が言い返して議論に花が咲いたものです。

何ヶ国か訪れて、最終地がスペインでした。旅の1年前、エアメールの山が3つほど外大図書館の机に積まれていました。イスパニア学科の同級生がペンパルを求めた一通の手紙に届いたもの。面白半分で読み始めたものの、スペイン人の手書きは読めませんでした。でも、一通だけスラスラ読めるのがあり、切手もきれいで書いてあったことが気に入って、持ち帰りました。1年文通を続けたのち、その手紙の差出人に会いにバスクへ。

その彼がのちに夫となりました。

卒業後は大阪で4年勤めた後、スペイン語と真剣に向き合いたくて、コンプルテンセ大学へ留学しました。スペイン語通訳の資格取得など少しずつスペインに近づきつつも、行ったり来たりを続けましたが、1995年の阪神大震災の後、結婚を決意。翌年にはマドリッドでの商社勤務も決まり、ヨーロッパに移り住みました。

勤め帰りに始めた合気道が、日本文化に惹かれるスペイン人たちとの最初の接点となりました。また、日本企業で現地日本人の立場というものも、少し経験しました。スペイン人と日本人の常識がかなり異なることも多く、複雑な思いもしました。でも、日常を楽しむ日本人上司も多く、ボーリング大会や金曜日のハッピーアワーなどもありました。また親しくなった同僚から、スペイン人の優しさにも触れました。

間もなく、夫の転勤でアンダルシアのマラガへ引っ越すことになりました。長男が誕生。オフィス通いから、美しい海ぞいをベビーカーを押して散歩するのが日課となりました。海に沈んでいく夕日を眺めながら、串刺しサーディーンとグリーンサラダを口にすれば申し分ない夕食でした。マラガでのバケーションのような一年後、今度はエストレマドゥーラに住むことに。バダホスで4年、カセレスで2年を過ごしました。

次男、三男が生まれ、食事が毎日の重要事。バスク人らしい働き者の夫の母から家庭料理を教わり、孫の面倒を見に来てくれた夫の父からは子供への接し方を教わりました。バスク人は食べることを重要視します。食べることは体を作ること、そして家族が集い語ること。

私の両親も出産時には駆けつけて、子たちの面倒を見てくれ、夫の家族ともいい関係を保ってくれました。



バダホス、カセレスでは近所付き合いが深く、都会と違い不便なことが多い反面、人々はお互いに助け合います。手作りケーキを持ち寄り、コーヒーを入れて女性たちがおしゃべり。でもおしゃべりと侮れません。大切な情

報交換の場なのであります。

夏は40度を超えることも多いため、昼間はシエスタでやり過ごし、まだ明るい8時ぐらいから道に水まきをして、やおら出かけるという具合。バダホスにはメリダなどローマ時代の遺跡があちらこちらにあり、ローマ時代

イスパニアと呼ばれていたイベリア半島。ご存知の方も多いでしょうが、イスパニアとはラテン語で兎の多い土地を意味するようです。カセレスはコウノトリが舞う、中世の美しい建物に囲まれています。



再び引っ越し。今度はバスクへ。やっと夫の家族のいる地元に行けることになり、仕事を見つけようと考えました。年に一度、座禅会で翻訳通訳の仕事はしていましたが 普段はしていませんでした。子供にもこれ以上転校をさせるのはいけないと判断し、バスクに住まいを定めました。

私の住むバジェ（トラパガ谷）から遠くないサンツウルセの語学学校で日本語教師の職を得て約 10 年。 日常はスペイン語、学校はバスク語の学生たちは日本語に対しても違和感がないのでしょうか。また、バスク語と日本語は響きが似ている言葉もあり、語順もほぼ同じです。接尾語を言葉に加え文ができるのも似ています。

彼らは漫画やアニメ、音楽などネットを通してどんどん情報を手に入れ、音楽アーティストを生徒たちに教わることもよくあります。ボーダレスの時代です。どんな生徒たちが日本語を学びに来るかという点、10 年前とでは様子が違います。前は、勤め帰りの男性が日本語をかじるという状況でしたが、今は 10 代、20 代の学生がフランス語やドイツ語を学ぶ感覚です。就職後も頑張る生徒もいます。

自分の意見をはっきり主張するのがスペイン人だと思う人も多いでしょうが、ネットやアニメで日本や日本文化に惹かれるのは案外シャイな子たちも多いのです。その一方で、テンションの高い笑いの絶えないクラスもあって、どちらも教えるのが面白いです。

授業内容を考える時、外大で先生方に教わったことがヒントになっています。福嶋先生のカセット音楽や一筆漫画などを思い出し、参考にさせていただいて

います。



また、夫は勤め先デパートで日本人客を見つけては話しかけ、お礼を言われると「かまへん、かまへん」を連発するのですが、数年前、日本からスペイン語講座のカメラ隊が彼の仕事場で撮影を行ったこともあり、とても楽しく観察させていただいたのはとてもいい思い出です。

我が子たちもどんどん成長していき、バスク語に苦戦しつつも無事進級を果たしています。スペインでは落第して学年をリピートするのも珍しくありません。そのため学校の勉強が第一で、日本語を教える時間が取れないのが悩みですが、少しずつできる時にとっています。

最後にビルバオといえば、地元サッカーチーム「アトレティ」。苦戦していますが、地元っ子から熱い応援を受けています。今では私もスタジアムへ通うほど大好きなチームとなりました。

アルカラ大学日本語授業

アルカラでの生活

穂原 三佳

1996年（平成8年）卒

2018年の春より、スペインのアルカラ・デ・エナーレスに滞在しています。同市のアルカラ大学と神戸市外国語大学との間に結ばれた交流協定に基づき、交換教員として大学付属の外国語センターで2019年4月まで日本語と日本文化に関わる授業を担当する予定です。博士課程在籍中に同じく日本語講師としてアルカラを訪れてから十数年、旧市街の街並みは変わることがありませんが、大学では各教室にコンピューターが設置され、学生もタブレットを教科書およびノートとして活用するなど、授業風景は様変わりしていました。

セルバンテス生誕の地として知られるアルカラ・デ・エナーレスは首都マドリードの北東約35kmに位置する歴史ある町で、1988年には大学および歴史地区がユネスコ世界遺産に認定されました。「セルバンテス博物館」、アルカラ大学の「サン・イルデフォンソ学院のファサード」、ローマ時代のモザイクが美しい「イポリトゥス（ヒッポリュトス）の家」ほか、多様な歴史的建造物が現存する旧市街は、国内外から訪れる観光客で一年中賑わっています。



アルカラ大学の外国語センターは、旧市街の中心部となるセルバンテス広場の南側にあり、現在アラビア語、中国語、イタリア語、フランス語、ポルトガル語、ロシア語、そして日本語の講座が開かれています。

各講座はレベルに応じて4クラスに分かれており、日本語講座も初級、中級、中上級、上級という4クラス体制で週に2回ずつ授業を進めています。

日本語クラスの受講生は、初学者から日本での就労経験をもつ人までさまざまですが、初級クラスでは仮名文字と基礎文法および会話表現等を重点的に学習し、中級以降では漢字の読み書きに加えてより自然な日本語表現を目指した中・上級文法を学んでいきます。日本語学習の動機も人それぞれですが、日本の漫画やアニメへの興味のみならず、日本語能力試験への挑戦、さらには日本留学といった近い将来に向けて具体的な目標を掲げた受講生が多く見られます。また、アルカラに滞在中の留学生も少数ながら講座に参加しています。日本または母国で日本語学習経験がある場合が多く、留学先でも日本語を忘れないようにと、スペイン語学習と並行して日本語のレッスンに励んでいます。

スペイン語と日本語の発音には類似点も多いことから、スペイン語話者の受講生の多くは、ひとたびひらがな・カタカナを学習すると、仮名文字で書かれた文であれば（意味はさておき）驚くほどすらすらと音読してしまいます。中にはイントネーションまでかなり正確に捉えている人もおり、尋ねてみると、日本のテレビドラマをほぼ毎晩見ているとのことでした。また、たいていの受講生は、YouTubeをはじめとする動画サービスやチャットを通して楽しみつつ



耳から日本語を学んでいるようで、面白かった動画や学習に役立つウェブサイトなどについて毎回の授業で情報交換しています。

こうした通信手段の発達も一因と考えられますが、スペインの人々にとって日本への旅が以前にも増して身近になったような印象を受けま

した。日本語クラスの受講生はもちろん、その友人や家族が日本を訪れた、ま

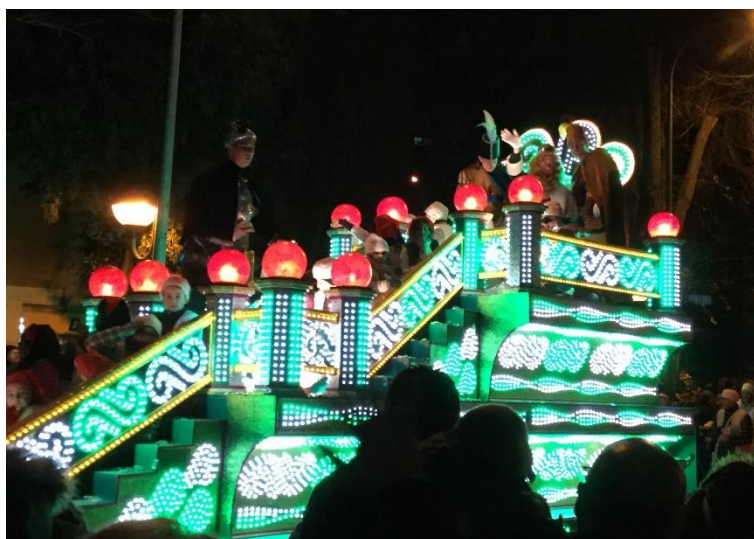
たは旅行を計画中であるという話をよく耳にします。観光都市ではスペイン語でのガイドを依頼できることが周知されており、外国語でサービス提供を行う宿泊施設が増えてきたことなどから、たとえ日本語ができなくても短期滞在であれば十分に楽しめると考えられているようです。

昨年秋に個人旅行で日本を訪れた中級クラスの受講生は、神社仏閣やおみくじ、さらに台風のためか人気のなくなった秋葉原の風景など、様々な写真とともにアルカラに戻り、授業の中で旅の経験について発表してくれました。実際に日本を訪れたり、クラスメイトから直に旅の話の話を聞いたりすることが、語学学習継続の上で大変良い刺激となっているように思えます。

外国語センターでは、語学の授業に加えて定期的に各国の文化を紹介するレクチャーを開催しています。昨年11月には中国、イタリア、モロッコ、ポルトガル、ロシア、日本という6か国に伝わる迷信をテーマに、各国語の講師が発表を行いました。それぞれの国の迷信やその由来を知るだけでなく、同じ動作が国によっては全く異なる意味をもつことや、地理的な隔たりのある国々の間で意外な共通点があることもわかり、大変興味深い合同授業となりました。

12月から1月6日の公現祭にかけて、アルカラではクリスマス市が開かれ、日没後もイルミネーションで照らされたセルバンテス広場は活気に満ちていました。特に、東方の三賢人の到来を模した行列「カバルガータ」が執り行われた1月5日の夜には、寒さにもかかわらず旧市街は大変な賑わいでした。

クリスマス休みが終わると、アルカラ大学は試験期間に入り、図書館の出入



り口やバスの中でテストやレポートの話をする学生の姿が数多く見受けられるようになりました。試験の後には、休暇を挟まず直ちに新学期が始まるのでなかなかハードですが、次の長期休暇となる4月の聖週間まで、しばらく学業に専念する日々が続きます。

メキシコに住んで

八木 優子

1975年（昭和50年）卒

1979年（昭和54年）修士課程修了

私が初めてメキシコの土を踏んだのは1979年の日墨交換留学生の時でした。そして、2度目にメキシコの土を踏んだのは1984年です。当初は3年計画の渡墨でしたが、今ではその10倍以上の年月が過ぎ去りました。

1984年当時、メキシコ市の公害対策は大した成果もあげていなかったようで、空港に降りた時から目のチカチカやくしゃみが始まりました。しかし、街の交通量は今よりはずっと少なく、どこに行くにも比較的簡単に移動でき、30分も車で郊外に出れば、トウモロコシ畑が広がり住宅や工場のない雄大な景色が広がっていました。現在も雄大な景色が広がっているのは変わりありませんが、車で1～2時間走らなければならなくなりました。

3年滞在の予定がこんなに長くなってしまったのにはいろいろな理由があるのですが、その最大の理由は面白いと感じる仕事に巡り合えたことだと思います。

1984年に来たときはメキシコ外務省の奨学生としてメキシコ自治大学文学部



スペイン言語学科でまじめに勉学に励んでいました。最初の半年は大学院に入るための準備過程で学部の授業を6科目ほど勉強しましたが、スペイン語文法のクラスはメキシコ人学生よりも私の方がよくできたことを覚えています。動詞の活用と綴りはほぼ満点でした。

「死者の日」の飾り付けが旗めくメキシコ市中央憲法広場

当地の大学や大学院では仕事をしながら勉強する学生は普通で、私も日本語をメキシコ人に、日本人駐在員にスペイン語を教えるアルバイトをし、そして、時々、日本大使館や国際協力機構から来る通訳依頼に応えていました。

本格的に通訳業務をやり始めたのは1985年のメキシコ大地震以降だったと思

います。通訳業務依頼が増えるにつれて、そして、大学院での科目をほぼ履修し終えた私は、自分の今後の進路を真剣に考え始めなければならなくなりました。アカデミー部門の職業に就くか通訳・翻訳の職業に就くかの選択の岐路に立ったのです。

修士課程で論文を書くことの大変さ、テーマの選択、研究論文に仕上げる苦労を実感していた私でしたが、本の虫、図書館の虫となって生きる生活と、実際に言葉を使って実社会のことを勉強しながら生きていく通訳者・翻訳者の道のどちらかを選ばなければなりませんでした。

そして、通訳・翻訳の面白さを感じ始めていた私は、迷わずフリーランス通訳翻訳者の道を選びました。

しかし、通訳翻訳学校に通ったこともなく通訳技術も知らないまま、大学で教えてもらった知識・技能だけを頼りに自学自習していかなければなりませんでした。でも、東谷先生や木村先生たちに厳しく指摘された、細かな点をきちんと訳すというやり方が貴重な基盤になったと思います。先生がたには感謝のことばしかありません。今でも難しい翻訳を手掛けているとき、日本の大学での基礎やメキシコの大学院でのシンタクシスの教授の指導に心から感謝しています。ただ、全ての文章がきれいに分析できるように構成されているわけではなく、今でもまだメキシコ人の手を借りて解釈する必要があることが多々あります。私のスペイン語理解力もまだまだです。



1986年、通訳翻訳業のフリーランスになったものの仕事はすぐに来るわけでもなく、遊んでいる時間の方が断然多い毎日が続きました。時間ばかりあつてお金はなかったのですが、あまり苦にはなりませんでした。月に200ドルほどの奨学金で生活していた身には2日働くと奨学金以上の報酬が入るフリーランス生

NHK World Japan の紹介業務の手伝い。

西語字幕が一部付くようになったので人気です

活は、本当に苦しくなかったですね。当時の仕事は国際協力機構の仕事がほとんどで、日本からのミッションが来ると2週間ぐらいの仕事となり、1回ミッションの仕事を引き受ければ数か月は食べていけるという気楽さがありました。慣

れない通訳業務ではストレスも溜まり、2週間仕事をすると仕事が明けた後の数日はぼうっとしてストレスの除去です。幸い今では仕事のストレスは1日ぐらいで取れるようになりました。やはり慣れは必要です。

もうかれこれ30年以上通訳をやっていますが、この仕事に飽きることはありません。一つ一つの案件がすべて違っているのが飽きないのです。30年経っても新しい案件の通訳依頼が来ると、関係資料を集めて勉強です。今は、インターネットで情報が集められるので準備作業も本当に楽になりました。お客様から直接頂く資料は非常に大切な情報で、じっくりと目を通しそのバックグラウンドを勉強しなければなりません。事前にもらえない情報も多くあります。当日、会ってからブリーフィングをしてもらい状況を把握して会議の狙い、方向性を確認していかなければなりません。文書にできない内容のこのブリーフィングがとても大切です。これは通訳の仕事にとって一つのポイントだと思います。お客様の本当の狙いをしっかりと理解していなければ、会議もうまく運べません。今でも通訳の初日は、初めてのお客様との出会いの緊張と、新案件の緊張でとても疲れますが、初日を何とか乗り切れば後は比較的楽になりました。

1985年ぐらいからやってきた国際協力機構の仕事は一つ一つ専門性が高く、一つのミッションのための事前勉強はなかなか大変です。家畜衛生、母子保健、子宮頸がん予防、稲作向上、農業機械、魚介類養殖、統計、生活廃棄物、産業廃棄物、植林、鉱物精選、耐震設計、防災、中古車処理、シャーガス病、製鉄などなど、テーマはまだあったように思います。そして最近ではメキシコの産業の発展に伴い、プラスチック成形、プレス金型、鍛造、鋳造、生産技術の改善へとテーマが変わってきました。もちろん、中米諸国への出張の際には一次産業のテーマがまだ主です。

民間からの通訳依頼案件のテーマにも変遷が見られます。1990年代になるとメキシコ企業も日本製設備を輸入するようになり、設備の設置・その後の操作研修の通訳依頼が多くなり、その後は「生産技術の改善」の指導で日本人コンサルタントがメキシコ企業の生産現場で指導するための通訳業務が増え始めました。

ここ5年ほどは、日系自動車会社の進出が顕著になり、出張者、進出企業の現場での通訳業務などが多くなってきています。この日系企業の進出のスピードは異常ともいえ、スペイン、中南米、日本からも通訳者がメキシコに出稼ぎに来ている状況で、それでもまだ手が足りないようです。ただ、今はちょっとアメリカ政権の圧力のせいで、進出活動が停滞し通訳者の雇用も横ばい、もしくは減速しているようです。

これら多岐にわたる案件のプロジェクトを長年通訳としてお手伝いしてきた

おかげで、通常、見ることも聞くこともない世界をゆっくりとみることができ、私の人生をととても豊かなものにしてくれたと思っています。人とは何か、何故、人はあるいは政府はこんなことをするのだろう、などなど、考える機会はたくさんあります。もちろん、自分の生き方についてもです。

ニカラグアのエビ養殖プロジェクトでは元ゲリラたちが組織しているエビ養殖場の方が普通の農民たちが組織した養殖場よりもきちんと機能しており、その理由を聞いて驚きました。元ゲリラたちはゲリラ時代に統制された生活をしていたので、みんなで決めたルールは守り責任感も強く、つらい餌やり作業や夜警もさぼらないでやっていたのですが、一方、農民組の方はさぼる人が多く、単純で退屈な養殖業務がきちんとなされないため、エビも育たず収益も上がらなかったということがありました。



Hotel Habana Hilton (現 Hotel Habana Libre)
キューバ革命当時、革命軍司令部が置かれていた

コスタリカではアメリカのチキータバナナ社が農薬を多量に使って農民が反米デモをしているのを目の当たりにし、水平線にまで広がるデルモントのパイナップル畑でここは大丈夫なんだろうかと考えさせられました。

内戦の和平協定締結後に入ったグアテマラでは、先住民が一つの家族の中で政府軍とゲリラ軍に分かれて戦う悲しさを聞き、元ゲリラの父親と孤児院で育てられざるを得なかった息子たちの断絶を垣間見ることになりました。

2008年、2009年頃の食糧危機の際には世界中で穀物価格が高騰しましたが、エルサルバドルでも主食のトウモロコシや小麦粉の価格が高騰しました。一番可哀そうだったのは、農地を持たずコーヒー園やサトウキビ畑で賃雇いされる貧農で、運悪くコーヒーの国際価格が暴落したということで1日1ドルの収入も絶たれていました。又、都市部に住む平の国家公務員も悲惨で、安月給では食べて行けず、3時で終了する通常業務の後、野菜卸売市場で荷物運びのアルバイトをして1ドル、2ドルのお金を稼いでいました。この年よりずっと前に、これらの国ではIMFや世銀がトウモロコシ栽培や稲作を止めて、穀物はアメリカ・カナダなどの大量生産国から輸入するように勧め、換金野菜を栽培するように指導していたことを思い出し、知らない事とは言え、なんとむごい指導を国際機

関はしていたのかと考え込みました。その頃の仕事である国の元農業大臣にインタビューをしたのですが、同元大臣も、いかなることがあろうと食糧安全保障を考慮し自給自足率を考えるべきであったと反省していました。

30年余り通訳・翻訳業務を通して世界のほんの一部を垣間見ることができ、人生の勉強もさせてもらえたのですが、このような個人的な体験ができたことだけをうれしく思っているのではありません。通訳・翻訳という裏方の仕事に徹しているわけですが、一つ一つの案件が大きな目的を持った複雑な機構の歯車の一つだと思っています。私たちの通訳翻訳業務はその歯車の、その又小さな一つの歯の役割でしかないのですが、歯車が目的の方向、目的のスピードでうまく回れるように尽力します。歯車が予定通りあるいはそれ以上にうまく回転するのを見る達成感も私たちを幸せにしてくれます。何かのお役に立っているという満足感です。



後輩で同窓生の田中恭子さんと組んでの同時通訳。

さて、話は変わりますが、去年12月からメキシコでは Andres Manuel Lopez Obrador (通称、AMLO)が大統領となり、新政権が始まりました。Populismoの最たるものでAMLOのばら撒き行政は大変なものです。例えば、65歳以上の高齢者には一律月に1250ペソ(約7000円)の年金を対象者70万人に支給するといっています。貧しい老人に支給するというのであれば賛同できますが、すでに年金を十分にもらっている高齢者にも支給するというとんでもないばら撒き行政です。その他に、勉強も仕事もしないニートに「学校に行くならば奨学金支給」などなど。このばら撒き用予算を一体どこから持ってくるのでしょうか。各省庁の予算の一律30%カットは去年の末に発表されています。

上級国家公務員の給与も大幅カットと大統領は命令を出しました。大統領よりも高額な給与は取れないと憲法にあるので、関連法を制定しようとしたものの、大統領より高給の国会議員が採決する国会で否決されました。裁判官も否決したという状況で、大混乱です。

スマートな犯罪者はガソリンを製油所から闇のうちに敷設したバイパスを使

って、そしてアナログ犯罪者はパイプラインに穴をあけて盗んでいるというニュースは世界中を駆け巡りました。

ここまで汚職がひどくなり、犯罪者が放置され正義が見えなくなり、一般市民の安全も悪化してくると、本当にここ、メキシコに住んでいられるのだろうかと真剣に悩み始めています。この答えはあと数年後に出てくることでしょう。

私の友人たちが住み、私の人生の半分を楽しく過ごさせてくれたこの大好きなメキシコがどうかいい方向に向かってくれるように願ってやみません。

海外インターン

メキシコでインターンシップ

田上 智貴
イスパニア学科3年

メキシコにインターンに行くことになるとは、当時は思ってもいませんでした。スペインに短期留学をした後、経済学の勉強がしたくて日墨戦略的パートナーシップに応募をしました。今振り返ると分かるのですが、内容の薄っぺらい志望動機で通るはずもなく、書類選考で落ちました。私費留学する余裕もない苦学生だった私は途方に暮れていました。その時、メキシコ留学に行っている先輩から日系企業がインターンできる学生を探していると連絡があったのです。直ぐに連絡を取り、4か月後の2017年9月にはメキシコのアグアスカリエンテスに飛び立っていました。

インターン先の会社は愛知に本社のある自動車の部品メーカーで、駐在員はスペイン語のできない日本人3名。スペイン語のできる人は私だけでした。私



が来た時はちょうど新しい車種の立ち上げ前かつ工場の拡張まであと1年という時期で、書類の翻訳に追われていました。相談できる通訳の方は誰もいない状態だったので、わからない用語があれば上司や本社の

San Marcos 祭で (左)

人間に問い合わせをして、自分なりにスペイン語訳が出来たらメキシコ人に見てもらい、またその後訂正という繰り返しをしていました。それ以外にも出荷データを基に factura を作って合弁会社に請求したり、自動車の組み立て工場出張者の通訳をしたり、日本では出来ない多くの経験をさせていただきました。毎日8時からお昼休みの30分休憩を入れ

て夕方まで働くことはすごく大変でしたが、とても有意義な時間が過ごせたと思います。

インターン以外でも様々なことができました。ずっと行きたかったテオティワカンやトゥルム遺跡を訪れたり、BSの旅番組みたいに1人で早朝のメキシコシティを歩いてみたり。中でもできて嬉しかったことは、通訳の講習会で出会った八木さんとの繋がりを初めに、連絡を取っていき、最終的に小規模な人数ですが、メキシコシティの日本食レストランで外大OBの方々と懇親会を開くことができたことです。先輩方と話すことで、将来自分が何をしたいか明確にわかるようになったと思います。

後輩にインターン業務を引き継ぎ、去年の9月に帰国しました。どこか味気ない学生生活に戻り、就職活動に勤しんでいます。将来はメキシコと関われるような仕事ができたらいいなと思っています。



インターン先の従業員と。皆がすごく優しくて、楽しく過ごせました。

日本のニュースでは、メキシコは殺人や強盗の多い危ない国といったような報道がされています。それ自体は否定しません。しかし、それ以上に人々の優しさが溢れている国です。来たばかりの自分をご飯や飲みに誘ってくれたり、旅行に連れて行ってくれたり、すごく温かい人たちがいます。いつか、また向こうにいる友人たち、先輩方と再会できたらなと思っています。

学生留学記

スペイン遊覧追想記

岩井 星華
イスパニア学科 4年

留学帰国後、兵庫県立美術館のプラド美術館展へ。作品群に囲まれながら、本場のプラド美術館を思い出していた。そして自身の留学のことも…

この度はイスパニア会の同窓会誌に自らの留学体験記を寄稿できますことを大変嬉しく思います。思えばはや半年前、交換留学でスペインのサラマンカへ行きました。サラマンカで過ごした10ヶ月が懐かしく感じられます。2018年はサラマンカ大学創立800周年で、そのような記念すべき時に留学できたことを光栄に思います。

留学生活はもちろん勉強が中心で、大学での授業に精を出す日々でした。毎日復習をし、テスト前は図書館に缶詰状態…苦しい状況で当時は毎日必死だったのかと、今では懐かしく思います。今回が初めての留学で、さらには親元を離れ一人暮らしというのも初めての経験だったのですが、意外と適応力があつたみたいですねと慣れることができました。周りの人はみなさん優しく、とても過ごしやすい環境でした。良い面良くなかった面含めてスペインを肌で感じられて、一生の経験になりました。サポートしてくださった国際交流センターの方々、先生たち、先輩方、友人そして家族に改めて感謝します。

交換留学は単位取得こそ困難ですが、反面長期休暇が多くあるといった利点があります。なので、これを利用してスペイン中を旅行しました。あえて他の国には行かず、スペインだけです。全部の州を訪れることはできなかったのですが、東西南北あらゆる場所へ行きました。日本にいた頃写真やテレビで見た観光名所や素晴らしい世界遺産の数々は、実際自分の足で赴いたからこそ今でも鮮明に覚えています。

旅先では主に美術館や博物館を訪れ、ひとりで延々と美術や歴史に触れながら過ごしていました。大学の授業で歴史や美術関係のものを履修していたので、学んだことが役立ち、また理解が深まって良かったと思います。日常会話で使うスペイン語とはかけ離れた語彙の数々に触れることができ楽しかったです。スペインを代表する画家の絵を保有する大きな美術館もあれば、こじんまりした小さな美術館など、片っ端から行って行っていました。パレンシアにあった小さな美

術館が可愛くてお気に入りです。観光客はもちろん、地元民らしき人もいなかったのゆえにゆったり過ごせました。博物館は地域によって特色あるものばかりでした。タラゴナやメリダのローマ博物館、アルバセテの包丁博物館、アストルガのチョコレート博物館、バレンシアの絹博物館、サモラのセマナ・サンタ博物館、サンティアゴの巡礼者博物館… 興味深いものばかりでした。スペイン語を学んでいるからこそ理解できる楽しさがあると思います。言語を学ぶのではなく、言語で学ぶ。これからもこの信念は持ち続けていきたいと思っています。

世界遺産に興味があった私は、スペイン中たくさんの世界遺産も訪れました。居住していたサラマンカはもちろん、バルセロナのサグラダファミリアを始め、トレドやセゴビア、アビラなどのマドリッド近郊都市からアンダルシア方面のセビージャ、コルドバ、グラナダといった主要世界遺産はしっかりと押さえました。個人的に印象に残ったものをいくつか紹介します。テルエルのムデハル様式の建物群は今までに見たことのない様式の建物に圧巻でした。そのうち、サン・ペドロ教会が写真可で太っ腹だと思いました。ポブレー修道院は少し行きにくくて辿り着いたときの感動がありました。エルチェの椰子園では整備されていない椰子が生えまくっている公園で迷いました。アンテケラのドルメン遺跡は放置されまくっていました。バルセロナのように観光客でごった返しているところもあれば、公園のような扱いのところもあるのだなとひしひしと感じました。全部を訪れることはできませんでしたが、いつか制覇したいと密かに思っています。

冒頭で触れたプラド美術館、いつでも楽しめるように公式のガイドブックを本場で購入してきました。もちろんスペイン語表記のもので、いつでもスペインが身近に感じられます。一学べば十知りたくなる性分ゆえ、脱線が多く勉強において良い成績を修めたとは言いがたいのですが、スペイン語を通して広がった興味や関心をこれからも大切にしていきたいと思っています。

卒業してから

スペインとのつながり

谷口 並子（旧姓 川形）

1991年（平成3年）卒

昨年夏、卒業して約30年ぶりにイスパニア学科同期の同窓会が開かれました。きっかけは、スペイン在住でトレド国際教育センターの校長を務めている友人の「イスパの同窓会したいね～」という何気ない一言だったのですが（笑）、せっかくだからクラス全員に声をかけてみようと、私含め数人で幹事となって始まった企画でした。

いざ準備を始めてみると、約30年という年月の壁は厚く、手紙やSNS等を駆使してもなかなか全員には連絡が行き届かず苦勞しました。それでも、みんなの協力の甲斐あって、ふたを開けてみると、西川先生を含め24人が全国およびスペインから駆けつけてくれるという、非常にうれしい結果となりました。



入学年度をとって、「神戸市外大 イスパニア学科’87同窓会」と銘打った同窓会当日は、進行を含め、久しぶりの旧友の顔と名前が一致するかドキドキでした。いざ始まってみると、西川先生はもちろん、みんな全く変わりなく、相変わ

らず個性的で賑やかで、しかも益々パワフルに生き抜いてきた面々が集結して、30年の壁を越えて会場は盛り上がりました。

残念ながら当日参加出来なかったメンバーにも事前に近況報告をいただいていたので、イスパニア学科の先生方はじめ、クラスみんなの近況報告をまじえつつ、懐かしい学生時代のエピソードや、今だから言える驚きのエピソードまで、本当に笑顔溢れる素晴らしい会となりました。

私自身が驚いたのは、前述のスペイン在住の友人を筆頭に、クラスの大半が、母校である神戸市外大の教授はじめ、スペイン語や外国にかかわる職業に携わっているという事実でした。外大なので当たり前のことなのかもしれませんが、学生時代にスペイン語習得に挫折して、結局、外国とは縁のない仕事についてしまった私には、自分の怠慢が非常に悔やまれる現実でした。そして、あらゆる分野で今でも新しいことに挑戦し、努力し続けている友人の姿や熱意におおいに刺激を受け、あらためて自分とスペインとの今までの、そしてこれからのつながりに想いを馳せるきっかけとなりました。

私とスペインの出逢いは高校の世界史の時間でした。もちろん、それまでも、スペインという国は知っていましたが、単に闘牛、フラメンコ、パエリアで有名なヨーロッパの最果ての情熱の国という程度でした。ある日の授業で先生が見せて下さったのはアルハンブラ宮殿の写真でした。教科書には「1492年、グラ



ナダ陥落、レコンキスタ完成」としか書かれていない史実を先生は自作の写真パネルと共に、普段にも増して情熱的に語って下さいました。私は初めて見るアルハンブラの美しさと魅力に釘付けになり、スペインという国を強く意識したことを覚えています。その

後1992年のバルセロナ五輪やセビーリャ万博開催予定も追い風となり、これからはスペイン語の時代だ！と進路が決定しました。

幸運にも神戸市外大イスパニア学科に進学出来て、大学2年の春休み、初め

て一人で訪れたスペインの旅はわたしの人生にとってかけがえのないものとな



りました。曇天のパリから夜行でチャマルティン駅に到着して、初めて見上げたスペインの空はまぶしいくらいに青く澄んで、パリで仏語が全く通じなくて冷たい対応にへこんでいた私の気持ちは一気に晴れ晴れとハイテンションに！1989年当時のスペインはまだ通貨もペセタで、英語も公共の機関でもやっと通じるかどうかと

いう時代でした。私自身まだスペイン語は片言でしたが、この異国の地においてその土地の言葉で現地の人達と意思の疎通ができるということの強みと素晴らしさをあらためて実感しました。マドリッドから始まって約1ヵ月、北はブルゴス、南はアンダルシア、そしてバルセロナへと貧乏旅行でしたが、見るもの、食べるもの、出逢った人達すべてが刺激的かつ、どこか懐かしく温かい。生まれて初めての異国の地で味わった感動は今でも忘れられません。

中でもグラナダで訪れたアルハンブラ宮殿は、ようやく出逢えた喜びと期待



以上の美しさで(特にアラビアタイルと唐草模様の漆喰飾り、宮殿全体を包み込む心地よい水音が印象的でした)、その時の感動は卒論のテーマとして選ぶきっかけにもなりました。ちょうどセマナサンタの時期で、涙を流す聖母マリアを乗せた神輿と共に練り歩く黒十字軍(笑)のような恰好をした人々は今も強く印象に残っています。

卒業後は残念ながら、もうスペインとの縁もなかなかないかと諦めていた矢先、私のスペイン好きが主人にまで伝染して、一人でスペインに旅立ち、すっかりスペインの虜に(笑)。結婚後は夫婦でマヨルカ島や巡礼の地へ。また、主人



の仕事でベルギー赴任の際には、マドリードやバルセロナだけではなく、子供達も一緒に車でピレネーを越えたり、アルヘシラスからモロッコに渡ったりと、あらためて家族と共に、より深くスペインとのつながりができたこと

に心からうれしく感じました。

しかし、ベルギー滞在中にはテロに遭遇し、移民問題を身近に考えさせられました。また、芸術を通してかつてスペインに征服されていたネーデルランドの立場からの歴史や文化に触れる機会もあり、学生の頃とはまた違った方向からスペインに触れることも出来ました。

ベルギーから戻り、いよいよ人生半世紀を迎えようとするこのタイミングで、



これから私とスペインとのつながりが、さらに太く、濃くなる予感と期待、そして勇気を与えてくれました。学生時代には叶わなかった語学留学もまだまだ諦めてはいません(笑)。これからも、いろんな形でスペインとのつながりを楽しみながら、深めていきたいと思

います。

卒業してから

私にとっての神戸市外国語大学

田中 いずみ（旧姓 花木）

2003年（平成15年）卒

「絶対、神戸外大と一緒に合格しよな。」

「もっと英語を勉強しないな！」

今から24年前の1月の半ば。高校1年生だった私がクラスメートと交わした忘れられない言葉だ。彼の英語力はクラスでもトップクラスで高校1年生にして英検準1級を取ってしまうような実力を持っていた。私も英語が得意だったはずなのだが、既にすっかり落ちこぼれになっていたそんな私と彼が交わした会話だった。

神戸外大と一緒に合格しようとそう約束した数日後の1995年1月17日、彼は阪神淡路大震災で命を失った。

この時、私は決めた。「志半ば人生を終えた彼の分まで頑張って、絶対神戸外大に行こう。」と。あのまま彼が受験していたならば、おそらく現役で合格していただろう。私はというと、その後も落ちこぼれからの脱出は難しかったが、それでも神戸外大を唯一の第一志望として貫いた。残念ながら現役では合格できなかった。でも、彼との約束も果たすために、浪人生活をした。

「何をしとんねん。頑張れよ！！！」

再受験へと勉強を続ける日々で、いつもどこからか、こんな彼の声が聞こえる気がしていた。生前の彼との約束が浪人時代の1年間を支えてくれたのは言うまでもない。2回目には念願だった神戸市外国語大学、イスパニア学科に合格。やっと彼との約束が果たせた事で、私は心から嬉しかったと同時に自分を誇らしく思った。高校の授業で初めてスペイン語に出逢い、スペイン語が奏でる響きの美しさと妖艶さに魅了されイスパニア学科に入学したものの、想像以上にハードな日々へこたれそうになることもあった。しかし、入学したことを悔やんだことは一度もない。なぜなら、素晴らしい先生方や友人達の出逢いがあり、学んだことは計り知れず、人間として成長させてもらえる場であったからだ。

在学中、木村先生が講義で話された忘れられない言葉があるのでぜひここで

紹介したい。

「もし、スペイン語が上手に話せるようになりたいから外大に来たという人がいたら、大学は辞めて某語学学校の駅前留学をお勧めします。スペイン語が話せるようになるために外大に来たのならお金と時間の無駄ですから。君達がスペイン語を通して様々な考えや価値観を学び、それを得て、新たな世界に触れることによって、今度は君達自身が何を表現するか、人に何を伝えるか。それがこの神戸外大で学ぶべきことです。天気の話ばかりしていたってつまらないでしょう。」

母国語である日本語ではもちろん、さらにスペイン語で自分の思いや考えを伝えられるようになること。人に伝える「中身」を蓄えること。技術的な語学力の向上はもちろん、スペイン語を通じて自らの内面を磨くこと。それが、外大で学ぶべきことのひとつだと、木村先生の本意とは異なるかもしれないが、私はそう解釈した。この木村先生の言葉は今でも私の記憶に鮮明に刻まれている。

私は 2003 年に卒業後、ホテルスタッフや公務員などいくつかの仕事を経て、現在は日本語教師をしているのだが、日本語教師という仕事においても先に紹介した木村先生のお言葉は大きな指針となって私の心の中に存在している。日本語学習者には様々な境遇に置かれた人々がいる。特に就業や就学のためのツールとしての日本語習得が優先される局面は実際には多くあるのだが、それ



けではなく、自らを表現する手段の一つとして、生活を、人生を豊かにするために日本語を学ぶという意義も忘れず、学習者と共に成長していくことができる教師でありたいと私は思う。

また、現在は日本語学課程の科目を履修するため、科目等履修生として外大に通い始めて2年になる。本来ならば学生時代に学んでおくべきだった積み残しを取り戻し、これからの仕事に生かすためでもあるが、社会人経験を積んでから

の40歳の大人として再び母校で学ぶことはとても貴重な時間となっている。懐かしさを感じるとともに、若い学生たちと共に講義を受ける新鮮さを感じる日々である。そして、日本語を教えるために母国語を見つめ直す時、イスパニア学科で得た知識や経験は日本語教師である私にとって、非常に貴重でかつ大きな財産になっていることを改めて認識させられた。

そして、卒業して15年、改めて外大での学生時代を誇りに思うと同時に、様々な人々と出逢い、この神戸市外国語大学との「縁」が繋がっていることに感謝している。科目等履修生として外大へ通い始めたことをきっかけに、卒業後、お恥ずかしながら楠ヶ丘会への会費を納めていなかったことを反省し、きちんと納めることにした。そして、木村先生と西川先生にお会いしたいという思いもあり、昨年の楠ヶ丘会総会へ出席した。そこで先生方には卒業後初めての再会を果たし、良きご縁を再び頂いて、大学同窓会の楠ヶ丘会新会長とイスパニア会の会報編集長とになられた西川先生からはこの会報へ投稿する機会を頂戴したことをこの場をお借りして心より感謝したい。

神戸市外国語大学との「縁」は私の人生の中で大きな意味を持つ。この良きご縁に心から感謝しながら、「外大愛」ともいえる、私の神戸外大への思いをこれからも大切にしながら、これからの人生も楽しみながら歩んでいきたいと思う。

卒業してから

『学生の本分を忘れずに！授業には出席しましょう！』

小野 勝利

2014年（平成26年）卒

私が大学3年生になりたての春、所属していた学園祭実行委員会（通称：祭）の幹部会で最初に取り決めた事項が、イベントの計画でも年間予算でもなくこれだった。残念なことに、大学2年生の終わりで同期が2名ほど単位不認定により留年するというたいへん不名誉な事件が起こり、「祭はアホの集まりや」と揶揄される寸前まで来ていた。当時の先輩方は、留学などで5年生になったりすることこそあれ、単位が取れずに留年するということはなかったのでそこに泥を塗るなどは決して許されなかったのである。

…正直なところ、私は神戸市外国語大学に4年間通っていて「留学」「就職相談室」「留学生交流サロン」といった、外大生の誰もが受けうる恩恵を一切受けずに卒業している。いや、ちょっと待ってほしい。私は祭だったがアホだったわけではない。卒論もスペイン語で比較言語学について47ページ書いたし、認定単位はほとんど5.0で成績は悪くなかった。ただ、海外の文化ではなく言語そのものに興味の対象があったので留学を選択しなかった。いわゆる言語オタクというやつで、今でもたまにスマホで「けいたい」と打つと「携帯電話」より先に「形態学」が予測変換候補にあがったりする。就活も諦め、大学生活も残りの1か月間は本気で院試の勉強に打ち込んだ。

そう、1か月。

1か月で何とかなると高を括っていたのである！当時の自分を見かけたら殴り飛ばしてやりたい。同輩が就活を始めた同じタイミングで、進学コースは勉強を開始するべきだったのだ！果たして結果は無残なもので、私は卒業式にお先真っ暗で卒業する羽目になった次第だ。

その後、地元の岡山で英会話教室の非常勤講師をしていたのだが、「やはり神戸に住んでいた時が楽しい！」と、「正社員じゃないとこの先不安…」という気持ちに苛まれるがまま神戸にとんぼ返り。何の縁かは知らないが、外大からほど近い温泉旅館で正社員として採用されることになった。

さて、ようやくここで初めてスペイン語の話題が出るのだが、その温泉施設で

サービス業を3年やる中で1度だけ、スペイン語を使う機会があった。メキシコ人が観光ついでに店舗に寄ったらしく、誰も英語すら話せないということで困っているとアルバイトから連絡があり、駆け付けて対応している時にスペイン語の訛りを感じた。スペイン語が話せるということを伝えるとその方はたいへん喜んで、「日本ではここに行ったよ」とか「こんなものを買ったよ」とか興奮気味に話してくれた。昔取った杵柄。その時の私のスペイン語はギリギリどころか、あらゆる文法が欠落していたのだが、それでも言葉は『知っている』だけでコミュニケーションのツールになるということを実感させられた。

そんな折、私が大学1年～2年までたいへんお世話になった西川喬先生の名前が、当館の宿泊予約票に出ているのを見かけた。事情を聞くと、外大のイスパニア学科の同窓会だそうだ。

この仕事をしていてよかった、と思ったのはこの時が初めてである。憧れだった西川先生の、その頃同窓生の皆様と畏れ多くもお話できる機会があるのかと思うと仕事にろくに手がつかなかった。予約の担当をすぐ変わってもらい、事情を説明したうえで空室手配や料理予約など、諸々の宿泊の準備を任せてもらった。



当日もアテンドをさせていただいたのだが、一介の元外大生（しかも2年までしか面識がない）にもたいへん親切にいただいたし、ご来館されていた西川先生の同窓生の方々にもご紹介に預かることもでき、さらには翌朝一緒に記念撮影までしていただくというこの

上ない贅沢を経験させてもらった。こういう時スペイン語で何と言うんだっか…ええと…¡Viva la vida!

人生は縁と縁が連なってできている。私の場合、スペイン語をこれまでの人生に活かしたことは相対的には少ないほうだと思うが、大学時代から繋がっている縁や、それをきっかけにした縁が私自身を支えてくれている、と思うことが度々ある。だから人生は面白いし、これからも繋がった縁は大切にしていきたい

と感じている。

さて、冒頭に書いた『学生の本分をわきまえて授業に出席する』という大学3年の公約だが、私はなんとか完遂できた。思い返すと大学3年生の時が一番授業にも遊びにも打ち込んでいたし、楽しかった。学園祭では企画を9つも持たせていただいて、サークルを立ち上げたり模擬国連という全国規模のイベントのお手伝いをさせてもらったりと、本当に密度が濃い1年だったように思う。

若気の至りか、はっちゃけすぎて髪の毛の色が1か月の間で「金色」→「青」→「紫」→「真っピンク」に染めまくるということもあったが、この話の詳細はまた機会があれば書くことにする。ただ、当時のピンク色の髪でキャンパスを闊歩する私を見かけた友人たちは、確かにこう言っていた。

「祭はアホの集まりや」

(小野 勝利 exxn.ash@gmail.com)

卒業してから

石井 葉子

2000年（平成12年）卒

昔から飛行機が怖くて、あの巨体が空に浮くというのが信じられませんでした。そんな私が初めて飛行機に乗ったのは、イスパニア学科 2 回生の時に大好きな野生動物を見に出かけた南アフリカ旅行でした。空の長旅の恐怖を乗り越えるために、風呂敷をリュックの底に忍ばせて「万が一の時には忍者ハットリくんのように飛び出せば大丈夫だから」と必死に自分に言い聞かせていました。この風呂敷のおまじないはその後のアルゼンチン留学、卒業後 2 年間のチリ勤務の際も私を助けてくれました。ブエノスアイレスへは関空からサンパウロ経由で 30 時間近くかかったでしょうか、利用したヴァスピ航空はずいぶん前に無くなったそうで、隔世の感があります。

南米で過ごした 3 年間で Vosotros の活用は辞書の片隅に追いやられ、Castellano(カステジャーノ) と Chilenismo が混ざったスペイン語を話すようになりました。今ではそれも錆びついてしまい情けない限りです。ブエノスアイレスではショーコと呼ばれることが多かったのですが(「Yoko」を Porteño が発音するとそうなります)、抑揚があって歌うように話す彼らのスペイン語が個人的にはお気に入りです。スペイン語だけで諸国漫遊できるのも南米の魅力であちこち旅もしました。中でも思い出深いのはマチュピチュで、豪雨による土砂崩れのためクスコからの電車が出ず、申し込んだツアーは中止かと思いきや、希望者がいれば線路の上を歩いて行くと言われて体力もないのに若気の至りと好奇心でつい参加、道中激流の上に架けられた丸太を渡ったり、他の参加者とはぐれて森の中を 1 人歩いたりしたサバイバルな旅路は、翌日全身筋肉痛で眺めた世界遺産よりもはるかに鮮やかに記憶に残っています。また、チリの高地で見た星空。ぎっしりと埋め尽くされた星の海の隙間に宇宙空間が垣間見えるといった強烈さで、星のまばらな大阪の夜空の方がよっぽど風情があるようにも感じましたが、南米の大自然の忘れられない光景です。

当時は、将来は海外で暮らそうと安直な海外志向を持っていたのですが、向こうで生活する中で、私は真夏に素麺がないと生きていけない体だということと、人間という生き物は日本でも外国でも本質的には一緒で、居心地がいいかどうかは自身の心持ち次第だということに気づいたことで、帰国後はすっかりインドア(国内)派になりました。外に出ると母国の良さがわかると言いますが、生ま

れ育った日本と自分自身を見つめ直すことができたのが、海外生活で得た一番の財産かもしれません。

その後、仕事面では教育機関や医療機関等で国際交流に関わる仕事を転々として今でも落ち着かず周囲を心配させ続けている一方で、飽き性の自分が惚れ込んで長年情熱を注ぎ続けているのが、バードウォッチングと植物観察です。先述した通り子供の頃から生き物、特に鳥が好きでしたが、すぐ身近に自然があるとは夢にも思っていませんでした。ところが20代後半に、職場の中庭でモズの高鳴きを聞いたのをきっかけに周辺のため池や農耕地に出かけてみると、野鳥があちこちにいてビックリ。以来、週末になると双眼鏡と図鑑をリュックに詰め込んで野外にでかけるようになりました。



ヤマガラ



イナモリソウ

そうやって鳥影を求めて山や森に行くうちに、目にする全ての植物には名前があるということを知って大いに感動し、植物の勉強にも取り組むようになりました。1回生の時のスペイン語教科書の例文に、Saber es amar, y viceversa. という一文があったように記憶していますが、まさにその通り、知れば知るほど興味が湧いて来ます。自然観察はいつでもどこでも幾つになっても楽しめますし、今後もライフワークとして続けて行きたいと思っています。皆さんも、気が向いたら窓から外を眺めて見てください。新たな出会いがあるかもしれませんよ。

最後に、卒業して20年近く母校とは疎遠を通していたところが、この数年医療通訳を勉強する神戸外大卒業生の方々と知り合う機会がありました。それが遠因となって2年前に淡路島で開かれた楠ヶ丘会総会に参加する気になり木村先生や西川先生と再会、そのご縁で今回本誌に文章を寄せることになった次第です。縁とは不思議なものだと思っていたら、不思議なことは続くようで、どうやら、生涯遭遇することはなかろうと思っていた media naranja と出会ったようでして、遅



まきながら人生の新たな幕が開こうとしています。どんな日々が待ち受けているのでしょうか、いや、どんな日々にしていきたいかですよね、¡Viva la vida!

卒業してから

泉村 寛之

1992年（平成4年）卒

先日、竹谷先生から声をかけていただき、イスパニア会の活動を知りました。会報のバックナンバーで皆様のご活躍を拝見し、懐かしく思ったり、励まされたりしています。

私は、1992年に銀行に就職し浜松に配属されたのですが、スペインか中南米と縁のある仕事をしたいという思いが叶い、1997年に語学研修生としてコンプルテンセ大学に半年間派遣されました。

しかしながらバブル崩壊後の不景気のおおりの受け、銀行がマドリードから撤退してしまったため、それ以降はスペイン語圏とは無縁の生活が続いています。

その後に配属された名古屋のお取引先がたくさん進出していた関係で2002年に天津に赴任したことをきっかけに、2回目の名古屋勤務を挟んで、2008年に上海にも赴任したため、通算7年間の中国生活を経験することになりました。

いまでこそ中国の経済成長の勢いは落ち着いてきていますが、最初の天津勤

務時には零下10度の寒空の下に自転車で通勤してきていた新入社員が、6年後の上海勤務時にはエアコン完備の自動車通勤する中堅社員になっていたり、計画でしかなかった高速鉄道網が中国各地を結んだり、北京オリンピックや上海万博が開催されたりと、きっと日本の高度経済成長期はこうだったんだろう、という社会の変化と人々の高揚感を肌で感じることができました。



中国では、公私ともにたくさんの中国の方々と一緒にさせていただきましたが、彼らにとっての内と外の壁の厚さにはとても驚かされました。知り合った当初と親しく

なっていて身内と認められた後では、これが同じ相手に対する接し方なのかと思

ってしまいました。きっと中国のように巨大で人口過多の超競争社会では、信じられるのは仲間だけ、仲間以外は敵、と考えるのも無理はないと、理解しました。

今住んでいる東京は**2014**年に異動したためですが、東京の第一印象は、夜景が上海に比べるとずいぶん地味だなということでした。東京での生活は今回が初めてなので、今は週末に関東地方の名所巡りをするのを外大での同級生だった妻と楽しんでいます。

四半世紀の社会人生活を振り返ってみると、引越しを**20**回くらいしたので、引越しが多かったなあと思いますが、一ヶ所に住みつづけていたら得られなかったであろう経験をたくさんすることができました。特に愛知万博と上海万博では子供たちが地元の小学生としてイベントに参加できたことはとても幸運だったと思いますし、引越しに付き合ってくれた家族にとっても感謝しています。

2025年には大阪で**2**回目の万博が開催されることになりました。まさかその時に大阪に住んでいることはないでしょうが、セビージャ、愛知、上海に続く**4**度目の万博体験なので、必ず行きたいと今から楽しみにしています。

卒業してから

外大を卒業してから

平山 敦士

2002年（平成14年）卒

先日、2002年3月に卒業してから初めて外大を訪問しました。竹谷先生からのお声がけもあり、イスパニア会総会に同回生と共に出席しましたが、実に16年ぶりのキャンパスでした。

学園都市駅の周辺や外大の食堂は、当時と少し変わっていましたが、校舎や部活に打ち込み過ごしたテニスコートは変わっておらず、学生当時のことが思い出され、非常に懐かしい気持ちになりました。

外大を卒業してからは、海外のインフラ関係に関わる仕事をしたいという思いが叶い、就職し東京勤務となりました。スペイン語専攻だったので、入社して一年目でグアテマラ、二年目にはドミニカ共和国に出張に行き、現地の会社と交渉し、契約書をスペイン語で交わすといった機会に恵まれました。ビジネスで使うにはまだまだのレベルでしたが、学生時代から使っていた辞書を片手になんとかまとめたことは今でもよく覚えています。また、ドミニカの現地宿舎では発砲事件があるなど、なかなかスリリングな経験もありました。入社して間もない私に、スペイン語ができるだけで出張に出してくれた当時の上司や会社に、感謝しかありません。その後も海外の仕事に従事し、クアラルンプールに約三年、ニューヨークに一年、ドイツのデュッセルドルフに五年半の駐在と、海外生活が続きました。

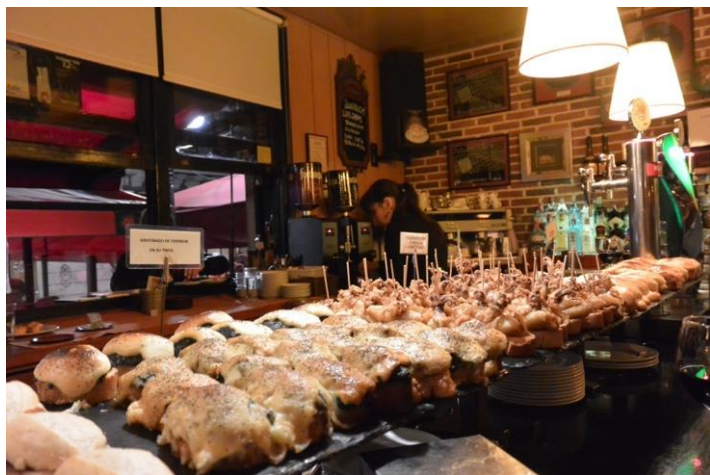


デュッセルドルフのビアホール

できた会社や年齢も違う仲間との出会いは、海外生活において時には大きな助

けになりましたし、今でも交流を続けながら、刺激をもらっています。

仕事を通じて、色々な国に行きましたが、その中でも改めてスペイン料理は素晴らしいと思いました。日本でも注目されてきましたが、特にスペインのサンセバスチャンは学生時代を含めると今まで3回も行くほど好きな街です。バルでワインを飲みながら、ピンチョをつまむスタイルは、日本人の嗜好に合い、かつ街の雰囲気も含めてぜひオススメしたい街です。



三年前に日本に帰国し、継続して海外に関わる仕事をしていましたが、新しいチャレンジとしてオンラインでアメリカの大学院に通い始めました。卒業までの履修必須14科目のうち残り1科目までとなりましたが、仕事と並行して学校の予習

や課題に追われる日々を過ごしており、外大で過ごした学生生活を思い出しながら勉強しています。限られた時間の中で、大量の英語の読み物やレポート作成はなかなか大変なものがあります。しかし、この歳になって新たに年齢や経験の違う同級生と切磋琢磨し、グループワークをすることは、自分自身の視野もより広がり、さらに成長させてくれました。

先日のイスパニア会総会で、木村先生が講話の中でおっしゃっていた「死ぬことを考えれば、何でもできる」という言葉を信じて、これからもいろんなことにチャレンジし続けていきたいと思っています。

同窓会

神戸外大イスパニア学科1期生、2期生合同同期会

イスパニア学科 1期生

報告 伊藤 明

伊藤 明 (9月16日)

やっと秋らしくなってきました。あの長く続いた猛暑の夏はどこに去ってしまっただけでしょうか。大変長らくご無沙汰ですが皆さんには元気でお過ごしのことと思います。すでに概略ご連絡していましたが同期会開催をあらためて下記の通りご案内しますのでご出席のほどよろしくお願いたします。



日時：2018年11月10日(土)

12:30~15:00

場所：四季自然食処「たちばな」

ヒルトンプラザイースト本店

会費：5,500円

料理：季節御膳コース(飲み放題付)

本会も卒業50周年を記念して2012年の秋に復活して以来今回で4回目を迎えます。年月の流れを感じています。早いようで実は長かったようでもあります。さらなる親交を深めたいと思います。

谷さんには2期生有志の方にご連絡をお願いいたします。なお鼓先生がご出席の予定です。当日の席確保のため10月10日までは出欠のご返事をお願いいたします。再会を楽しみにしています！

中津 聡 (9月18日)

幹事役お疲れ様です。62才で見つけた輸出検査のアルバイト職10年以上経ち昨年パート契約更新はしないと通告されいよいよ終わりと思いましたが業務委託という形でfreelancerとしてまだ働いています。後期高齢者となっても

世の中から必要とされ働けるのは至上の喜びです。高々10数万の収入ですが有ると無とでは天地の差が有り、大半は年金では足らぬ生活費に充て、残りで毎日晩酌付きのプチ贅沢、更に多少の貯金をして苦勞を掛けっ放しの妻を帯同して年に一度旅行するのが楽しみです。

前置きが長くなりましたが今年は今中歐へ旅行申し込んでおり奇しくも同期会と重なったので残念ながら今回は欠席します。ご出席の皆様に宜しくお伝えください。次回はお互いに喜寿となる節目の年ですので是非出席したいと思いません。

バンド活動は相変わらずやっています。3回生るときカントリーバンドで初めてウッドベースと出会い生涯の友となりましたが、8月に突然連絡が入り一緒に練習しないかと誘われ外大以来実に50数年ぶりにハンクウィリアムスを演りました。会社務めと違い同好趣味の世界は利害関係がないので一生つづきこの年になっても新しい同好の輪が広がるのは素晴らしいと思います。9月23日に西区区民センターで小生所属のバンドが出演しますのでお時間取れば一度覗いてみて下さい。



足立吉晟 (9月18日)

外大イスパニア学科同期会のご案内状を戴き有難うございます。当日は間違いなく出席致しますのでどうか宜しく願いいたします。皆様にお会いできるのを楽しみにしています。

杉井皓一 (9月30日)

楠ヶ丘会誌やHPにはイスパニア会が10/20(土) 14:30から神戸外大第二学舎で開催され、その後懇親会との案内が掲載されていますが、各人への案内が無いので関係者以外にご存知無い方も居られると思います。皆さん出席されるのでしょうか。

谷 善三 (10月3日)

凌ぎやすい気候になりました。皆さんお元気にお過ごしのことと思います。早速ですが、2期生からは今のところ、下記女性2名が出席と連絡がありました。中西(旧姓寺島)博美さんと清原(旧姓安田)澄江さんが出席です。前回

出席した柏木さんも私も欠席です。追加出席者がいましたら、直ぐ連絡致します。



若林南海男 (10月7日)

同期会開催ありがとうございます。最近2週間以上先の予定を組むと、意地悪くそのときに限って断れない業務が発生して家族から総スカンです。今回もなんとなく不安なんです。どうしても皆さんの顔を見たく、若干不安なんです。参加させていただきます。

伊藤 明 (11月5日)

本日は同期会ご出席お疲れ様でした。おかげさまでとても楽しいひと時を過ごすことが出来ました。ありがとうございました。今回の会計報告を下記します。



会費収入	20名×5500＝	110000
たちばなへの支払い	21名×5000＝	105000
<u>鼓先生へのお祝い</u>		<u>3540</u>
	残高	1460

鼓先生は招待としました。残額は次回まで私がお預かりしときます。

ここもと集合写真を添付しますので思い出のページにお加えください。(荻内さんは早退されていて写っていません) 2年後にまたお会いできるのを楽しみにしています。お身体に気をつけて元気にお過ごしください。 Muchas gracias!

PS:伊藤嘉太郎さん、お手数ですが写真コピーしていただき今度鼓先生に会われる時にお渡しいただければありがたいです。

杉井皓一（11月11日）

いつもながらの名幹事ご苦労さまでした。お陰さまで
久し振りに皆さんと楽しく語らっている間に時間が経っ
てしまいました。スナップ写真を貼付しましたので御笑
覧ください。2年後の再会を楽しみにしています。



伊藤 明（11月11日）

杉井さんに続いて、荻内さんから素敵な写真を送って
いただきましたので、添付にて皆さんに送らせていただきます。足立さんがと
ても幸せな、いい顔されていますね！

足立吉晟（11月11日）

神戸外大イスパニア学科一期及び二期の合
同同期会を開いていただき、心より楽しく愉
快な時間を過ごすことが出来ました。伊藤さん
をはじめ色々とお世話を頂いた方々、それに
今回の出席された方々に厚く御礼申し上げま
す。荻内さん、素敵な写真を有難う御座います。葬式用の写真としてコピーし
ます。また次回お会いできる日まで、お元気で過ごしてください。



若林南海男（11月11日）

あだっつあん、ほんまにええ写真エエなあ。それにつ
けても儂のんはだらしない☺



中西（寺島）博美（11月14日）

伊藤さんには本当にお世話になりました。
集合写真に荻内さんのスナップ写真、
皆さん本当に楽しそうで若いです。（大
体、仲間うちでは皆そう思えますね。）2
年後までどうぞお元気で。またお目にかか
りたいと思います。



中村俊昭（11月28日）

伊藤明さま、先日はご苦勞様でした。お蔭様で久しぶりにご壯健な鼓先生や皆さんと会って少しばかり活力を頂いた感じです。又貴重な写真を提供いただいた方々にも感謝です。早速お礼のメールをと思いながら遅くなりましたが、プロバイダー変更のため従来のアドレスが11月末日で使用できなくなりますので、本日送信の差出人アドレスに変更をお願いします。寒さも厳しくなってきました。皆様ご自愛ください。



語劇祭

イスパニア語劇団・語劇祭について

仁ノ内 詩穂
イスパニア学科4年

第69回語劇祭が12月15・16日に神戸アートビレッジセンターにて行われました。今年度のイスパニア語劇団の演目は、ホセ・エチェガライの『拭われた汚辱』（原題：*Mancha que Limpia*）で、例年続いていたアレハンドロ・カソーナの作品から一転、2014年の『燃ゆる暗闇にて』（原題：*En la Ardiente Oscuridad*）以来の悲劇作品を上演することとなりました。



本編のあらすじは、「舞台は1890年代スペイン。親を亡くし、裕福な家庭に引き取られた2人の女性マチルデとエンリケタ。2人は、その家の息子フェルナンドをめぐる対峙する。そしてある日、1つの噂が事態を急変させる！愛に翻弄される人間関係。人の心に潜む善と悪。汚(けが)された過去、名誉、魂すべてを清

めるものは一体。」というものです。

2018年度イスパニア語劇団が掲げた目標は「記憶に残る劇を…」です。一昨年のアレハンドロ・カソーナ作の『立ち枯れ』（原題：*Los Árboles Mueren de Pie*）や、同作者の『漁夫なき漁船』（原題：*La Barca*



sin Pescador) と比べると、今作品は端的にいうとハッピーエンドで終わるよ



うなものではありませんでした。そのため観客に“夢のような2時間を”与えるのは難しいと考え、監督と演出で話し合った結果、「観客一人一人が良くも悪くもどこかの部分で強く共感を得られるような劇にしよう」ということを具体的な目標に入れました。

今年度はメンバーこそフレッシュでしたが、みなしっかりと意見を出せる面々ばかりでした。部署ごとにこだわりをもって挑んだので、それが劇を作り上げていくうえで良い影響となりました。イスパニア語劇団史上前例をみない、場面にあわせて一から曲を作ることに挑戦した音響。



舞台設定にあまり変化がなく表現が難しいと言われるなか、照明演出でスローモーションにみせたり、時間の移り変わりや役者の心情変化などを色の変化で魅せたりするなどした照明。キャラクターごとの性格を口調だけでなく字体か



らもみてとれるように、また、一瞬一瞬で場面が切り替わっていく中でも内容が追いつくようにセリフを分かりやすくかつ短くまとめた字幕。小さいものは血のりから大きいものはソファまで、大小かわらず舞台で使用する家具や道具はすべて一から作り上



げた大道具。一人二役だと悟られないためのヘアメイク及びメイクで変化をつけたり、物語の流れや登場人物の雰囲気にあったメイクや衣装選びをしたりするなどした小道具。裏方が、そして自分が準備してきたものすべてを観客に表情で、声で、セリフで、動きでしっかりと魅せる、い

わば語劇団の看板を背負う役割を担った役者。そして、よりよい作品づくりのため劇団運営に全力を尽くしてくれた監督。劇団員 26 人のそれぞれが 3 か月間準備してきたものを集結して、後にも先にもない唯一の『拭われた汚辱』ができあがったと思っています。

今年度の語劇祭の結果といたしまして、イスパニア語劇団は優秀劇団賞を、個別では、裏方は音響賞を、役者は最優秀助演賞・優秀主演賞・優秀助演賞・若葉賞をいただきました。

2018 年の漢字に「災」が選ばれたように、今年度は日本国内だけでも災害の絶えない年となりました。そんな中何事もなく、無事に第 69 回語劇祭を迎えることができたのも、決して当たり前なことではなく、応援して下さった先生方や今までイスパニア語劇団を導いてくださった OG・OB の方々のご指導があり、語劇祭を開催するにあたり KAVC スタッフの方々が支援して下さったからであります。そして声援を送ってくれた友達や家族の支えがあったからです。本当にありがとうございました。

語劇祭もいよいよ来年で 70 回目を迎えようとしています。お越しいただくみなさまに満足してもらえるよう更なるレベルアップを目指し、劇団一同精進してまいりますので、これからも何卒ご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。



2018 年度イスパニア語劇団団員

Libro interesante

竹谷 和之

1979年（昭和54年）卒

『ムシエ 小さな英雄の物語』



キルメン・ウリベ著

金子 奈美訳

白水社 2015年

あらすじ

スペイン内戦下の1937年。ゲルニカ爆撃の直後、約2万人のバスクの子ども達がビルバオから欧州各地へ疎開した。8歳の少女カルメンチュはベルギーの疎開先へと引き取られた。その一家の青年ロベール・ムシエはカルメンチュの機転が利き、愛おしい行動に魅了される。第二次大戦の勃発でカルメンチュたちは荒廃したバスクへと帰還を余儀なくされる。その後ロベールは結婚し、娘をもうけ、カルメンと名付ける。スペイン内線の取材から反ナチ抵抗運動に加わったロベールは強制収容所に収監される。大戦末期には収容所から港まで移動させられ、船上でイギリス軍の空爆にあう。父の記憶をもたないカルメンは、父の足跡をたどりはじめる。

読後に思う

私は仕事でバスクの世界遺産ビスカヤ橋の近くをよく散歩していた。対岸河口付近にサンツウルティという地区があり、その友人宅やバルにはよく立ち寄ったが、本文に登場する児童疎開のハバナ号が船着場から出航したことは思

いも寄らなかった。現在の河口両岸は、歩道が整備され子ども達が家族との憩いの場になっており昔の面影はない。しかしこの移動吊り橋は戦禍をくぐり抜けて、人々に愛用されつづけている。

この小説はある人物(ロベール)の過去に光を当てて、当時を鮮明に蘇らせる。過去と現在を往還させてくれるキルメン・ウリベの手法に感謝である。著者は最初バスク語で書き、その後自らスペイン語で書くそうである。バイリンガルの場合は、翻訳するとは言わないと思うが、羨ましい限りである。さて、次のテーマは何だろうか、新進気鋭の若手バスク作家に期待したい。

Libro interesante

本橋 祈（旧姓 柴田）
1998年（平成10年）卒

El libro negro de los colores

もうすぐ“真っ黒な絵本”が日本に生まれます



El libro negro de los colores（著：Menena Cottin、絵：Rosana Faria、発行年：2006年）は、ベネズエラの作家によるメキシコ生まれの絵本です。タイトルは「色についての黒い本」「カラフルな真っ黒な本」「色とりどりの黒い絵本」などと訳せるでしょうか。真っ黒な本、というのは比喻でも大げさな表現でもなく、本当に真っ黒な紙で作られていて、さらに、そこに印刷されているイラストには色が使われていません。いちごや芝生、青空、枯れ葉などのイラストは、すべて透明なインクの隆起で描かれているのです。



そして、シンプルなスペイン語で書かれているのは、トマスという“目の見えない男の子にとっての色の世界”です。

トマスが言うには、黄色はマスタードの味。でも、ひよこの羽の手ざわり。赤は、いちごみたいに酸っぱくて、すいかみたいに甘い。でも、ひざを擦りむいたときみたいに痛い。(本文より一部を翻訳したもの)

2006年にメキシコのココロテ社という児童書出版社から出版されたこの本は、翌年のボローニャ国際児童図書展で児童書として最高の賞と言えるラガッツィ賞を受賞しています。これまで、世界15か国以上で翻訳出版され、2011年にはIBBY(国際児童図書評議会)のバリアフリー図書にも選定されました。

これほどの優れた書籍で多くの国の言葉に訳されている絵本ですが、日本語版は出版されていない、ということを知り、この本の存在を教えてくれたNPO多言語多読のスペイン語グループの方から知らされた私は、昨年、この本の日本語版出版のために、クラウドファンディングを呼びかけました。

多言語多読の皆さんと一緒に、私のこの挑戦を引き受けてくださったのは、サウザンブックス社という出版社。サウザンブックスは、少部数でも本当に読みたい人がいる本を、クラウドファンディングの仕組みを使って世に出そうというコンセプトで翻訳出版を行っている会社です。

8月3日から10月30日までの90日間、公私かまわずとにかく助けに来てくれる人に声をかけ続けました。SNSや自分の勤めている会社のメーリングリストなども活用しましたが、なんとといっても外大イスパニア学科の同級生が自ら行動をして、外大祭にチラシを置いてくれたり、同窓会でアナウンスをしてくれたりしたのが嬉しかったです(鈴ちゃん、ありがとう!)。そこから、ここイスパニア会の先輩、後輩の皆さんにもたくさん支援をしていただきました。ありがとうございました。

クラウドファンディングは無事に目標金額を達成し、今年の夏には、日本語版が刊行される予定です。日本語タイトルは未定ですが、予約を受け付けていますのでぜひ下記サイトを訪れてみてください。昨年のクラウドファンディングについての活動報告もご覧いただけます。

この本が、また多くの人と人をつないでくれることを願っています。

<http://thousandsofbooks.jp/project/blackbook/>

神戸市外大同窓会・楠ヶ丘会の総会および懇親会のご案内

神戸市外国語大学楠ヶ丘会
会長 西川 喬

2019年度の神戸市外国語大学同窓会・楠ヶ丘会の総会と懇親会が下記の要領で開催されます。なお、同日に行われる講演会は木村榮一先生により行われます。会員の皆様には、お誘い合わせてぜひご出席いただきますようご案内申し上げます。

日時：2019年6月2日（日曜日）午前11時より
（受付は10時30分より）

場所：ANA クラウンプラザホテル神戸 10階ボールルーム
（新幹線新神戸駅すぐ。地下鉄三ノ宮駅よりひと駅）

- 内容：1. 総会（11時00分～11時50分）
2. 講演会
講師 木村榮一
神戸市外国語大学名誉教授／楠ヶ丘会名誉会長
3. 懇親会
アトラクション・抽選会など

参加費：5000円（新卒会員は無料。但し、会員費2000円お支払いください）

申し込み：まもなく送付予定の案内状に同封された払込取扱票でお申し込みください。

☆案内状が届かない方は、次のメールアドレスまたはファックスにて、楠ヶ丘会事務局にお問い合わせください。

メールアドレス：office@kusugaoka.jp

ファックス：(078) 794-8108（平日10時～16時30分）

締め切り：2019年5月15日（水）

近況報告

石田 敦子（旧姓 小坂） 1984年(昭和59年)卒

この11月、35年ぶりにバルセロナを訪れました。前回、まだ建設中で薄暗かったサグラダファミリアは、ステンドグラスを通して色とりどりの光が差し込んでいました。ピカソ美術館、カタルーニャ音楽堂など初めて訪問した所も素晴らしく、改めてバルセロナの魅力を感じる旅となりました。

スペイン語を学んでいなければ二度も行かなかったかな？と思うと、人生における出会いとは不思議なものだと感じました。

角田 鈴（旧姓 日笠） 1998年(平成10年)卒

卒業後職場を転々としながら貿易事務をしています。スペイン語に触れる機会はほとんどないですが、イスパの同級生とは年に一度集まっておいしいものを食べ、くだらない話をし、涙が出るほど大笑いしています。しかし、くだらない話をしつつも実は第一線で活躍したり、家庭をしっかり支えていたり、私の同期はただものではない人ばかりです。そんな友達の姿を見て、私も頑張らないとなーと、良い刺激を受けています。授業で得た知識も財産ですが、卒業後20年以上続く長い友情も外大で得た大きな財産の一つとなっています。

大山 久美子 1998年(平成10年)卒



在籍中は4年間、学食でアルバイトしていました。調理師免許も取得させていただき、「イスパニア語学科に通って調理師免許？」と親に不思議がられたのを覚えています。卒業後は神戸に行く機会もなく、お世話になった方にも不義理なことをしているなあと感じる次第です。現在、東京スカイツリーのおもとの商業施設で働いています。スペイン語圏のお客さまも多く、「Que tenga un buen día」とお見送りすると



とても喜ばれます。みなさまもどうぞ素敵な日々をお過ごしください！

神戸市外国語大学イスパニア会 役員名簿

2012年06月02日

2015年05月23日

2016年05月28日

2017年05月13日

2018年10月20日

会 長	内田 雅夫	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
副会長	佐藤 孝三	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
副会長	田岡 敬造	(25回)	昭和51年(1976年)卒業
理事長	竹谷 和之	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
常任理事	田尻 陽一	(15回)	昭和41年(1966年)卒業
	安藤 典子	(26回)	昭和52年(1977年)卒業
	富尾 圭子	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
	小野 賢一	(30回)	昭和56年(1981年)卒業
	野村 竜仁	(41回)	平成 4年(1992年)卒業
	成田 瑞穂	(45回)	平成 8年(1996年)卒業
	穂原 三佳	(45回)	平成 8年(1996年)卒業
	飯島 祐子	(47回)	平成10年(1998年)卒業
理 事	谷 善三	(16回)	昭和42年(1967年)卒業
	池沢 英一	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
	柴野 元秀	(19回)	昭和45年(1970年)卒業
	増野 俊則	(22回)	昭和48年(1973年)卒業
	和久田 好男	(23回)	昭和49年(1974年)卒業
	齋藤 仁	(24回)	昭和50年(1975年)卒業
	松久 恵美子	(31回)	昭和57年(1982年)卒業
	塩川 雅美	(32回)	昭和58年(1983年)卒業
	石田 敦子	(33回)	昭和59年(1984年)卒業
	伊藤 卓郎	(35回)	昭和61年(1986年)卒業
	中澤 純一	(43回)	平成 6年(1994年)卒業

吉田 昌洪 (43回) 平成 6年(1994年)卒業
伊藤 かおり(44回) 平成 7年(1995年)卒業

監 事 高岡 麻衣 (44回) 平成 7年(1995年)卒業
森川 香織 (53回) 平成16年(2004年)卒業

「会員の近況報告」に関する投稿規定

2015年3月制定

2016年2月改定

1. できるだけ、「ワード」で書いた原稿とすること。
2. 原則として、200字程度とする。
3. 文字サイズは12、字体はMS明朝体とする。ただし、この字体がなければ、他の字体でもかまわない。
4. メール添付で送付のこと。メールは、同学年の理事またはそれ以外の理事に送付すること。
5. 写真を提供することができる。ただし原則として、本人が写っているもので1枚限りとする。なお、写真の掲載の可否およびそのサイズに関しては編集委員会に一任するものとする。
6. メールアドレスは原則として掲載しない。しかし、本人が希望すれば、掲載することができるので、その旨を明記すること。

編集後記

「イスパニア会」会報第6号をお届けします。

今回は6年ぶりの総会、記念講演及び懇親会についての報告、スペインやメキシコに在住されている方々からの報告、インターンシップ報告、語劇祭報告など多彩な内容となりました。原稿をお寄せいただいた皆さま方にお礼を申し上げます。

第3回総会&懇親会はこれまで神戸市内のホテルで開催されましたが、今回は神戸市外大で初めて実施され多くの参加を得ました。今後も母校へ再訪していただく機会を提供できればと思います。多数の写真には恩師の先生方や懐かしい顔も見られると思います。またその他の投稿ではまだ見ぬ彼の地への想像を刺激され、一度訪問してみたいと思われる方がおられるかもしれません。

今回より新企画として、「Libro Interesante」を設けました。スペイン語圏の小説、写真集、絵本など、原書や翻訳など会報へご紹介いただけるものがございましたらどうぞ投稿をお願いいたします。

今後はイスパニア会のネットワークをさらに広げ、会報の内容が充実するように努力していきたいと思います。同窓の方々へどうぞお声掛けをよろしくお願いたします。また会報内容についてご意見がありましたら、編集委員へご連絡ください。

会報編集委員

西川 喬
齋藤 仁
田岡 敬造
吉田 昌洪
伊藤 かお里
竹谷 和之（記）

イスパニア会 会報 第6号

神戸市外国語大学イスパニア学科
イスパニア会

イスパニア会会報 第6号
2019年3月31日 発行
発行責任者 内田 雅夫
編集責任者 西川 喬
発行所 イシダ印刷株式会社
